

2023 (令和5) 年度

京都府NIE実践報告書



Newspaper in Education

(教育に新聞を)

京都府N I E 推進協議会

目次

□ 発刊にあたって	京都府N I E推進協議会 会長 位藤紀美子	…… 1
1. 生き方探究（キャリア）教育の視点でのNIEの活用について	京都市立新町小学校 主幹教諭 西村 崇	…… 2
2. 感じる つながる 自分から 自分らしく「かがやき」学びをつむぐ ～新聞の効果を理解し、自分たちの願い・思いを表現する～	京都市立御所南小学校 教諭 栗津 慎太郎	…… 6
3. 新聞を活用して、友達と考えを深め合い、自分の考えを発信しよう！	京都市立光徳小学校 教頭 岡本 洋子	…… 10
4. 「自ら学び続ける力」を育成するための新聞の活用 ～実践1年目、子どもたちが新聞を楽しむために～	京都市立七条第三小学校 教諭 小栗 佳奈	…… 14
5. 「読解力」「コミュニケーション力」を育む新聞活用	京都市立神川小学校 教諭 中川 和幸	…… 18
6. 新聞を読み取る力を活用し、表現する力を育む	京都市立羽束師小学校 研究主任 古田 祐子	…… 22
7. デジタル時代におけるNIEを通じた「国語科」の実践	京都市立西京高等学校附属中学校 教諭 矢倉 裕也	…… 28
8. 「スクールG I G A構想・DX(デジタルトランスフォーメーション)」 との共存を目指して	京都市立小栗栖中学校 校長 今津 敏一	…… 34
9. 「正解のない問い」と向き合う	綾部市立八田中学校 船越 寿子	…… 38
10. 新聞を活用した主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究	宮津市立栗田中学校 塩見 優真	…… 43
11. 新聞記事の読解、発表を通じて、読解力及び表現力、批判的思考力を育成する	京都府立峰山高等学校 教諭 馬木 勇語	…… 48
12. 新聞記事を通じて視野を広げ、社会につながる	京都橘高等学校 教諭 小坂 至道	…… 54
13. 過去の新聞報道から学ぶ地震災害の被害状況や防災について ～震度と被害の関係から防災に対する意識向上を目指して～	京都両洋高等学校 教諭 西村 将太	…… 60
□これまでの実践校、準実践校、奨励校、トライアル校		…… 64

※報告書内の時制・所属・肩書きは、2023年度在籍校のものです。

発刊にあたって

ご あ い さ つ

京都府N I E推進協議会
2023年度 会長 位藤 紀美子

2023年度の京都府N I E実践報告書をお届けいたします。教育実践に直接携わる先生がたを中心に、関係機関の多くのかたがたのご協力やご支援を賜り、厚く感謝を申し上げます。コロナ禍もあり大きく変動した社会状況で、学校や家庭でのデジタル化は急速に進み、教科書もデジタル化に向け、基本となる教材に加え、選択や発展学習のための教材・資料を用意しはじめています。

このようななかで、このたびはN I E実践指定校の小学校6校、中学校4校、高等学校3校から、取組状況のご報告をいただきました。

児童・生徒の発達段階の違いはあるものの、新聞活用の方法等は、ほぼ共通してきています。①まず、「朝の時間」で、各自が興味ある新聞記事を見つけ、班や学級で話す（話し合う）さらに、学年や全校にコメントを添え掲示。②次に、教科学習（社会科や国語科が多い）との関連で、教材と関連する新聞記事を探し、より広く深く発展学習を行う。③さらに、教科からの発展もあるが、新聞社との協力のもと、授業で、記者のかたに記事の着眼のしかたや作成方法を学んだ上で、児童・生徒が自分たちでテーマ（今日の社会的課題が多い）を選び、実地に取材や記事執筆、編集をして新聞を作成し、発行・掲示や配布する。

学習の入門にあたる小学1～3年（文字の読み書きや構音器官等成熟期など）は準備期として、それ以降、「朝の時間」で新聞に親しみ社会への視野を育てつつ、教科学習や総合学習・研究で実際に活用し、各自の意見や考えを形成し、発表・交流する場になっております。

こうした学習を通して、児童・生徒の興味や問題意識が、個人や学年としてどうなっているか、さらに「市民教育」への発達段階として実態を明らかにすることも大事です。デジタル社会が急速に進む中で、日常の生活面における各自の身近な体験（特別の行事だけでなく些事と思われがちな、したことや見聞したこと）や読書を題材に、出来事や自分の考えをことばや文章にして考えることも重要です。「視写」や「聴写」は、手や耳を通して、そのことばや文について考える手段です。得た情報を自らの体験と関連づけて考えることもいっそう必要になってきています。多種多様な記事や広告が掲載され、公的な情報である新聞は、着眼の仕方により、児童・生徒の興味や問題意識をさまざまに刺激し、学習者自身が協力し合いながら、課題やテーマを育てることが可能であると、多くの実践成果から改めて思います。

京都府N I E推進協議会は、2024年8月1～2日開催の第29回N I E全国大会京都大会を主管しました。成果と課題をもとに今後の展望と具体的な方針をたてたいと考えております。どうぞこれからもいっそうのご指導やご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

生き方探究（キャリア）教育の視点でのNIEの活用について

京都市立新町小学校 主幹教諭 西村 崇

1. 実践の概要

本校は、「自ら進んで考え、ともに高め合い、夢に向かって歩む子の育成」という学校目標を掲げ、研究に関わる取組を進めてきた。

研究では生き方探究（キャリア）教育について長年取組を進めており、研究主題を「社会的自立を目指す子どもの育成」目指す子ども像を、①人や社会とかかわり、学び合おうとする子（人間関係形成・社会形成能力）②自分を知り、自分をコントロールできる子（自己理解・自己管理能力）③課題を見つけ、解決する子（課題対応能力）④目標を思い描く子（キャリアプランニング能力）に設定し、生き方探究教育における基礎的汎用的能力を伸ばしていくことが必要だと考えてきた。

また、本校では目指す子ども像をモチーフにした新町キャラクターを作り、子どもたちにも基礎的汎用的能力が理解しやすいようにしている。これらのキャラクターを毎日の授業やあらゆる教育的な活動の場面で示すことにしている。



NIE実践指定校となり、この学校全体で取り組んでいる生き方探究教育にNIEを有効に関連付け、取組の一部として加えていくことで、より目指す資質能力に近づけるのではないかと、また学校全体に広めていきやすいのではないかと考えた。まずは新聞に親しみをもってもらうような取組を中心に進めていった。

2. 新聞の置き場所と活用方法

新聞は、学校図書館に置いて、児童がいつでも手に取って読めるように環境整備を行った。読み物として読むだけでなく、バックナンバーで調べ学習を行うなど、学校図書館の学習・情報センターとしての役割をより一層高めるものになっていた。また、バックナンバーは授業に必要な学年が持っていき活用できるように、一定期間職員室に保管をし、必要な時に使えるようにした。

また、学校図書館に新聞を置いても教職員はなかなか新聞を手にする機会がないため、

朝の時間は職員室の交流スペースに新聞を置き、朝の教職員同士の会話の話題にしたり、朝の会で児童に話すネタを探したりするようにした。若手の教員はとくに新聞を家庭でとっていることも少ないので、まずは手に取って新聞がどんなものかを知ってもらうことから始める必要があると感じた。

さらに、児童が一人一台所有しているGIGA端末をなんとか有効に活用できないかと考え、配信される新聞のワークシートを全校児童が閲覧できる共有フォルダに保存して共有し、朝学習の時間や、空き時間に児童が読書の代わりに読めるようにした。



人や社会とかわり、
学び合おうとする力



3. 実践の内容

○育成学級「おひさま新聞」の取組

★生き方探究教育との関連（人間関係形成・社会形成能力）

育成学級（おひさま学級）では、人間関係形成・社会形成能力の向上と関連し、「おひさま新聞」作りの実践を年間通して行った。育成学級の児童は個々に別々の課題を抱えているが、とくに人間関係形成については、人と関わるのが苦手な子、自分のことはたくさん話せるが、相手に何かを伝えることが苦手な子など様々な実態がある。

おひさま新聞は、自分たちの自己紹介からはじまり、学習したことのまとめや、運動会などの行事の頑張りを伝えるなど、全校児童や来校者に向けて相手意識をもって作成される新聞となっている点が大きな特徴である。

子どもたちは「おひさま新聞」を作成するというゴールに向かって、日々の学習に意欲や見通しをもって取り組む

ことができている。また、新聞は記事を書く子、写真を撮る子、色を塗る子など、異学年で構成される育成学級においても役割分担がしやすく、全員で1つのものを仕上げるといった達成感を感じられるものであった。「おひさま新聞」は完成をすると、必ず職員室へ全員で行き、校長・教頭をはじめ、そこにいる教職員全員に向けて説明をする時間を設けている。自分たちの新聞を得意げに嬉しそうに伝える姿はとても生き生きとしていて、人間関係形成・社会形成能力が育っている姿だと感じることができた。また、紹介後は玄関前に掲示をし、多くの人に見てもらえる壁新聞としての機能を十分に果たしていけるものになった。



○6年生の取組

★生き方探究教育との関連（課題対応能力）

社会科の歴史単元で、「歴史新聞作り」を行った。歴史の学習において単元ごとに学習したことをまとめたり、自分が探究したいと思った課題について調べたことをまとめたりすることにした。子どもたちはGIGA 端末を使って作成するか、手書きの新聞にするか選択して作成するようにしたが、デジタルで作成する子の方が圧倒的に多くなる結果になった。資料や写真等が手軽に貼り付けられることや、加工がしやすいこと、書くことが苦手な子も短時間で作成できることが原因だと思われる。

6年生は新聞学習においても今までの積み上げが一番あり、よく新聞を手にとって読んだり、見出しやレイアウトを工夫したりする姿が見られていた。新聞の機能学習を通して学んだことが、他教科や領域にも広がっていることを実感することができた。

課題を見つけ、
解決する力



○3年生の取組

★生き方探究教育との関連（自己理解・自己管理能力）

京都新聞社の方に来ていただき、新聞に関する授業を行った。友だちの「今熱中していること」を取材して、見出しと記事を書いて交流をした。普段から一緒にいる友達のこと、いざ取材という形で聞いてみると、知らなかったことをたくさん聞くことができた。また、よい見出しを取り出して全体で紹介していただいたことで、子どもたちが見出しをどのように書けばいいのかもよく伝わった。

3年生はこの学習のあと、社会「商店のはたらき」においてパンフレット作りの学習を行った。見出しをつけたりインタビューをしたりした経験を生かして自分なりに創意工夫する姿が見られた。

自分を知り、
自分をコントロールする力



○委員会活動（新聞委員会）の取組

★生き方探究教育との関連（人間関係形成・社会形成能力）

新聞委員会では、全校児童に新聞を通して「学校全体をよくしていく」ことをテーマに話し合ったことを、新聞で伝える活動を行った。また、新聞を読んだり書いたりすることがみんなの身近なものになるように、新聞委員会が学校独自のキャラクターを考えた。児童朝会（全校集会）の際にはキャラクターの候補の

人や社会とかわり、
学び合おうとする力



小学校 総合的な学習の時間等

感じる つながる 自分から 自分らしく「かがやき」学びをつむぐ ～新聞の効果を理解し、自分たちの願い・思いを表現する～

京都市立御所南小学校 教諭 栗津 慎太郎

1. 実践の概要

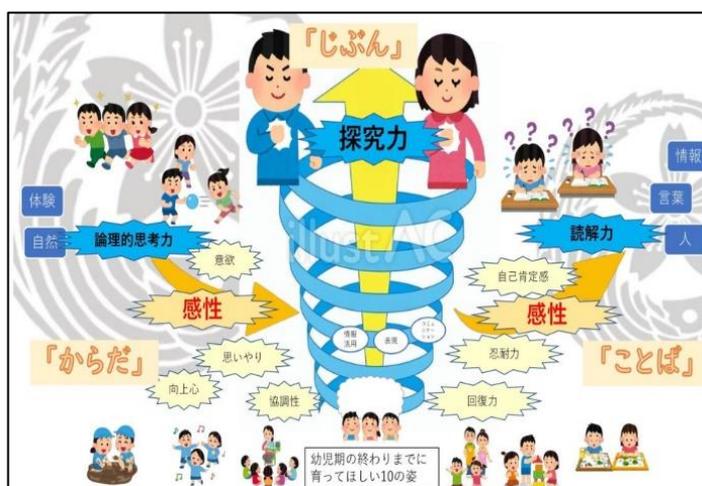
本校は、「感じる つながる 自分から 自分らしくかがやき 学びをつむぐ子ども」という研究主題を掲げ、生活科・総合的な学習の時間、国語科、体育科を中心に取組を進めている。

その中でも特に、次の2つの力を基盤として研究を進めてきた。1つ目は、「読解力」である。様々なテキストはもちろん自分以外の「他者」、直面した「状況」・「事象」を読み解く力のことを指す。そして、2つ目は、「論理的思考力」である。情報と情報、既存の知識・経験などを結び付

けながら、筋道立てて考える力である。これらの力を基盤とし、子どもたちが問題解決に向かって探究する子どもたちの姿を目指している。

その中でNIE実践指定校初年度の令和5年度は、5年生を中心に実践を行った。総合的な学習の時間「かがやき」における探究的な学びの中で、新聞というメディアの効果やよさを実感するとともに、自分たちの「もっと多くの人に伝えたい！」という思いや願いから主体的に学ぶ姿を期待して取り組みを行った。探究的な学びの中で、必然性のある新聞との出会いにより、子どもたちの「よりよく伝えたい。」という思いに火が付く様子が見られた。

ここに実践の成果と課題を報告する。



2. 環境としてのNIE

①玄関ホールの新聞コーナー

子どもたちが新聞に触れ合える環境として、玄関ホールに新聞コーナーを設置した。数社の新聞を用意して、その日の新聞が手軽に読めるようにした。学年関わらず、登校してからの朝の時間や休み時間、さらには放課後まで新聞を広げて読む子どもたちの姿が見られた。新聞コーナーの近くには、読書に親しみ、腰をかけて本を読むことのできる「読書の木」があり、その周辺で新聞を読む子も見られた。



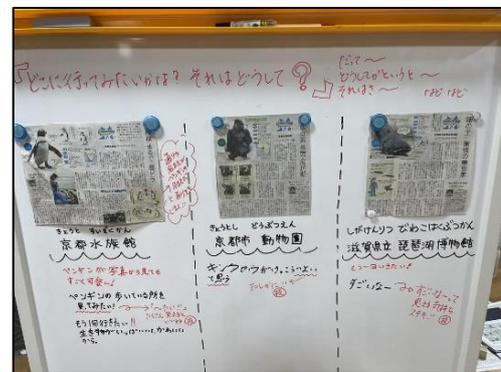
②英語に触れる教材として

新聞コーナーには英語版の新聞も設置した。英語版の新聞は世界のニュースも知ることができるとともに、教科の学習で学んだ表現も見られる教材である。また、「今週の見出し英語」として、見出しの英語を切り抜き、和訳を掲示するなど、子どもたちが興味をもてるように意識してコーナーを設置した。



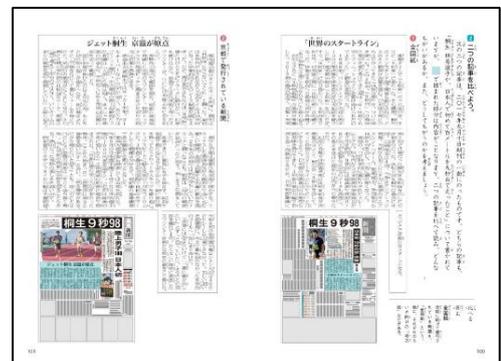
③みんなで書き込む新聞掲示板

定期的に比較できる記事や子どもたちに問いかける記事の掲示板を設置した。記事を読むことはもちろん、問いに対して自分の考えや意見を書き込んだり、その根拠を表したりするなどの工夫を加えた。子どもたちはその前で立ち止まり、書き込む姿が見られた。また、校長先生からのコメントもあり、嬉しそうにする姿も見られた。



④5年国語科「新聞を読もう」

国語科の学習では新聞の基本的な構成について学習した。同じ出来事の記事を伝える場合であっても全国紙と地方紙では伝える内容がちがうことに気付いたり、表現の違いに着目したりすることができた。教科書教材だけでなく実際の新聞も活用して学ぶことで、さらに新聞に興味をもって読む姿が見られた。



3. 実践事例

号外新聞で御所南小学校 30 周年を地域の人に伝えよう！

～総合的な学習の時間との関連を生かして～

令和5年度に5年生で実践に取り組んだ事例を紹介する。

総合的な学習の時間で「御所南小学校 30 周年を地域の人に知らせたい。」という思いから学習をスタートした。そこで号外新聞と出会い、新聞という方法で地域の方に向けて発信することにした。

まずは、自分の思う通りに号外新聞を作成してみた。しかし、上手くまとめることができず、迷ったり、困ったりする児童が多くいた。そこで、クラス全体で悩みを共有する時間を設定した。「どのような文章を書けばよいかわからない。」「どのような写真を使えばよいのだろうか。」など、困りを話したり、それらに共感したりする声が上がった。そして、困りや悩みの要素を整理すると「文章構成」・「見出し」・「資料（写真・図）」の3つに分けられた。次時は、それぞれの困りを解決するために、3つの視点で新聞を研究していくこととした。

まず、同日に発行された3社の新聞を児童に配布した。前時で分けた3つの視点で、自分が困っていることを中心に研究した。個人で調べる子もいれば、同じ視点同士の子でグループを作って調べることもできる

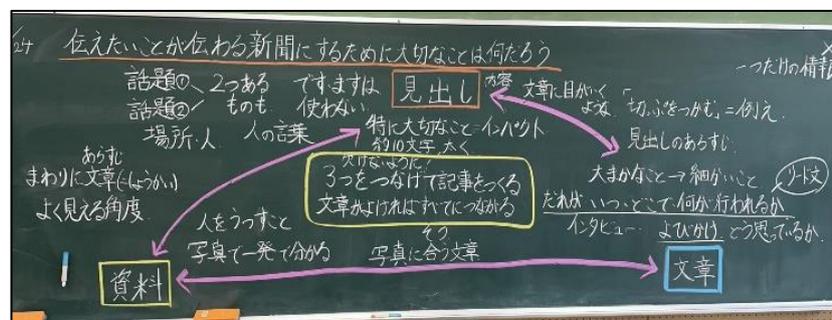
ようにした。それぞれの新聞を比較・関連付けて読むことで共通点や相手に伝えるために大切なポイントを自分で獲得していく姿が見られた。(写真1)

次の時間は調べて分かったポイントをクラス全体で共有することにした。「だれが、いつ、どこで、なにをしたのかをリード文にする」、「例えの言葉を使って表現するとわかりやすい。」「伝えたいことによって写真が変わる。」といったポイントを交流する中で、3つの視点はいつもつながりあっていることが見えてきた。

「見出し」、「資料」、「文章構成」がつながり合っこそ、よりよい新聞を作成できるとい



(写真1) ICTを活用してまとめる様子



(写真2) 3つの視点がつながりあうことに気付く板書

うことに気付く時間となった。(写真2)

これらの学びを生かして子どもたちは号外新聞を作成した。地域の方に配布をして学習を終えた。(写真3)

今回の単元では、自分が一番伝えたいことは何かという思いをもつことを大切にしたい。毎時間、自分の学習を内省するために書くふりかえりでは、「私の新聞は写真と文章が合っていない。パッと一目で30周年のイベントをするのだとわかる見出しと写真を考え直したい。」と試行錯誤しながら取り組む姿が見られた。

4. 令和5年度の実践から

最後に令和5年度の実践を終えて見られた成果と課題について述べる。

【成果】

○ 総合的な学習の時間との関連で取り組んだことが必然性を生んだ。

子どもたちの中に「伝えたい」という思いがあるからこそ、「どのようにすればよりよく伝えられるのか。」という問題意識をもって取り組むことができる。

○ 困りを整理し、視点を定めると子どもたち自身で資質・能力を獲得できる

教師はファシリテーターである。子どもたちの困りを共有し、整理することができる。「自分に足りないのは見出しのインパクトだな。」「もっと文章をうまくまとめたいな。」と自分の課題を明確にして、自ら資料を読み解こうとする。

【課題】

● 新聞を作成することだけでない学習を模索する

新聞は端的に分かりやすく、多くの読者に伝わる工夫が詰まった貴重な資料である。(写真4) それらの工夫に触れ、実生活で生かすことができるような学習を展開していきたいと感じた。新聞を作成するという学習以外にも、社会科などでの資料としての読み取りなど他教科にも生かすことができるようにしたい。



(写真3) 作成した号外新聞



(写真4) 新聞のポイントを伝え合うことも

小学校 国語科・総合的な学習の時間など

新聞を活用して、友達と考えを深め合い、 自分の考えを発信しよう！

京都市立光徳小学校 教頭 岡本 洋子

1. 本校の概要

本校は、JR 丹波口駅から徒歩5分のところに位置し、児童は通学路として五条通りを歩いて通学している。校区には京都市中央市場や京都リサーチパークがある。令和7年度に創立100周年を迎える。令和4年度より「自ら学び 自信と誇りをもち 共に高め合う子の育成」を学校教育目標に掲げ、育成したい資質・能力を「問題解決力」と「コミュニケーション力」としている。また、自己肯定感の向上を基軸として知・徳・体の3プロジェクトを立ち上げ、全教職員が目標を達成するために一丸となり学校教育を進めている。

2. 実践の概要

令和5年度からは、NIE実践校として「新聞を活用して、友達と考えを深め合い、自分の考えを発信しよう！」というテーマで1年間、取組を進めてきた。NIE実践用の新聞やはがき新聞原稿用紙、透明ポケット「ミテミテ」を活用して、各学年の授業だけでなく、さまざまな教育場面で実践することができた。総合的な学習の時間では、新聞記者の方をゲストティーチャーとして招き、インタビューの仕方や新聞のレイアウトなどの構成について教えていただいたり、学んだことを壁新聞にまとめて発表したりした。

3. 新聞の置き場所と活用方法

5・6年生の教室前にNIEコーナーを設置し、毎月2社の朝刊・夕刊を配架した。朝の読書の時間や休み時間などに、児童は自由に新聞を手にとって読むことができた。スキルタイム（帯時間）で取り組んでいる「対話力アップトレ



ニング」では、新聞で見つけた記事について、二人組やグループで意見交流をした。はがき新聞原稿用紙はいつでも自由に使用できるよう種類ごとに棚に備えた。

4. 実践の内容

① 3年生 総合的な学習「すてき 大好き 光徳のまち」

校区内にある京都市中央市場や京都リサーチパークについて調べたことをグループごとに新聞にまとめた。新聞にまとめる際には、はがき新聞原稿用紙を活用し、見出しやレイアウトなどを工夫することができた。出来上がった新聞は参観日に発表し、実際に新聞を見てもらった保護者から感想やアドバイスを受けることができた。



② 4年生 国語「新聞をつくろう」

単元の導入では、実際の新聞を見て、新聞のよさを見つける活動をした。児童は同じ日の同じニュースでも、見出しの言葉やレイアウトによって伝わり方が違うことに気づいていた。児童は自分が興味を持ったテーマを決め、それについて資料を集めたり、インタビューなどで情報を集めたりした。はがき新聞原稿用紙を使うことで、文字数を調整したり、レイアウトを工夫したりすることができた。出来上がった新聞はお互いに見せ合うことで、良いところや改善すべきところを学ぶことができた。



③ 5年生 学級活動「伝える」「伝わる」を考える

京都新聞の記者の方にゲストティーチャーとして来ていただき、新聞の制作やインタビューの仕方について学んだ。記事を作る上で大切なインタビューの仕方を聞き、実際に二人組になってインタビューをした。児童は「話をつなげるのが難しかった」「どんな質問をしたらいいのか困った」「意外と話がつなげられた」などの感想があった。



④ 5年生 総合的な学習「わたしと仕事」

「わくわく WORKLAND」で学習したことを、はがき新聞原稿用紙を使って考えたことや感想を記録し、透明ポケット「ミテミテ」をファイルに貼って、学びの記録として保管し、単元のまとめの振り返りの時間に活用した。

⑤ 6年生 国語「メディアと人間社会」

京都新聞の記者の方に来ていただき、新聞やインタビューについての話を聞いた。児童は今まで学習で作ったり、読んだりしてきた新聞には、いろいろな秘密があることを知った。また、新聞をつくるのに欠かせない「インタビュー」の仕方やコツなどの話を聞き、実際にインタビューをした。児童は話を広げることにも苦戦をしながらも、「まちの好きなところ」というテーマに沿って友だちに質問をし、メモを取っていた。「どこが好き」という質問から始まり、「そこのお店のなに味が好きなのですか?」「そこのおすすめは?」など話をつなげることを意識してインタビューをしていた。



⑥ 6年生 スキルタイム「対話力アップトレーニング」

スキルタイム(帯時間)の中で、新聞記事から見つけたニュースを話題にして、付箋を使ってメモをとりながら聞いたり、質問をしながら話を広げたりして対話を楽しむ姿が見られた。



5. 成果と課題

【成果】

- ① 身近なところに新聞を配架することで、気軽に手に取ることができ、児童の話題が国内だけでなく、世界各国のニュースにまで及び、広がりが見られた。
- ② どの学年の児童も新聞作成を行う中で、子ども同士で新聞の内容を吟味し、時間を費やして検討をしていた。そのため、児童は自分自身で新聞を作り上げるという意識があり、熱心に取り組むことができていた。
- ③ 学習の中で常に、はがき新聞原稿用紙を活用したことにより、学習の積み重ねができていく。特に学年が上がるにつれて新聞記事を何度も読み返すようになり、記事となる文章を自分たちでもわかりやすい表現で作りに上げていった。そして記事を書く際には新聞の練られた文章を参考にするようになり、記事として書きあげることができるようになった。
- ④ 記事の内容をそれぞれが深く理解しているため、発表する際にも表現上の工夫がみられ、詳しく発表している姿が見られた。
- ⑤ 今年度の学校評価アンケートでは、「自分の考えが上手く伝わるよう、資料や文章・話の組立などを工夫して発表することができる」という項目に、高学年は72.3%が「できる」「だいたいできる」と答えていた。

【課題】

- ① 新聞の配架は高学年が中心となっていたので、図書館に配架している子ども新聞なども有効活用できるようにしたい。
- ② 児童の「聞く力」「話す力」はまだ十分とは言えない。今後は自分の考えを相手に伝えるだけでなく、考えを深めるために質問したり、意見を言ったりするインタビュー等の話し合い活動に力を入れていきたい。
- ③ 記事内容を熟考して練り上げるために新聞作成の時間をできるだけ確保する。
- ④ 新聞を仕上げる中で、写真を使用したり、彩色したりするなどの工夫が児童の中から出せるように意識づけをしていく。
- ⑤ 新聞を取っている家庭が少なくなっている現状をふまえて、デジタル新聞など ICT の活用も検討していきたい。



小学校 全学年 国語・社会科・生活科・総合的な学習の時間・図画工作等
「自ら学び続ける力」を育成するための新聞の活用
～実践1年目、子どもたちが新聞を楽しむために～

京都市立七条第三小学校 教諭 小栗 佳奈

1. 実践の概要

本校は「未来を拓く～めざそう！なりたい自分～」を学校教育目標として掲げ、全ての子どもたちが「なりたい自分になれること」「将来やりたいと思ったことができること」、義務教育修了時に「進路選択の幅を広くもてること」、そして、自分の未来でだけではなく、社会全体の未来を拓く力をつけることを目指して日々の教育活動に取り組みました。

令和5年度は、NIE実践協力校の指定を受け、子どもたちが新聞を通して学ぶという貴重な機会をいただきました。国語科で新聞の作り方や読み方などを学びますが、新たな実践に取り組むとなれば少し二の足を踏むこととなります。そこで、「実践の第1歩目は校長室から」と考えた学校長が子どもたちにとって新聞が身近なものになるように取り組んできたこと、そして、NIE実践代表教員として取り組んできた実践と各教科における取組事例を紹介します。

2. 実践内容

○ 配架と掲示の工夫

NIE実践協力校1年目は、9月から各新聞社の新聞が常時4紙以上朝刊・夕刊が届けられるように申し込みました。実践1年目ということもあり、まずは子どもたちが新聞に触れる機会を増やしたいと考え、子どもたちが登下校時や体育館利用時に通る機会の多い、校長室前に配架することになりました。ただ配架するだけでは子どもが興味をもって新聞を手にするのではないので、写真掲載が多いスポーツ面や近隣地域に関することが掲載される地域面、クイズが掲載されている紙面を開いて配架するようにしました。また、週1回程度子ども向けの紙面を掲載する新聞社があるので、その中でも子ども



たちの目を引くイラストや興味を持ちそうな写真の記事などを切り抜いてコメントを付けて別途掲示をするようにしました。

「この写真見たことある。朝のニュースでもやっていた。」「阪神 38 年ぶりの優勝。校長先生が小学生の時やったらしいで。」「どうして中古のスマホがゴリラを救うの?」と紹介した新聞記事やコメントを読む姿が見られるようになってきました。

京都市では各校新聞を 2 紙購入することになっていますが、本校では学校司書と相談し、令和 5 年度は一般紙と子ども向け新聞を購読しました。学校図書館のより一層の利活用を促すために、配架場所は図書館にし、学校司書にも協力してもらい、他の新聞と同様に子どもたちが読みたくなる記事の一部を廊下や校舎内各所で紹介するようにしました。



新聞掲示をする際には、子どもがより興味をもてるように、クイズの形式にするとともに、クイズの回答の詳しい説明は新聞記事を読めば分かるようにするなどの工夫をしました。

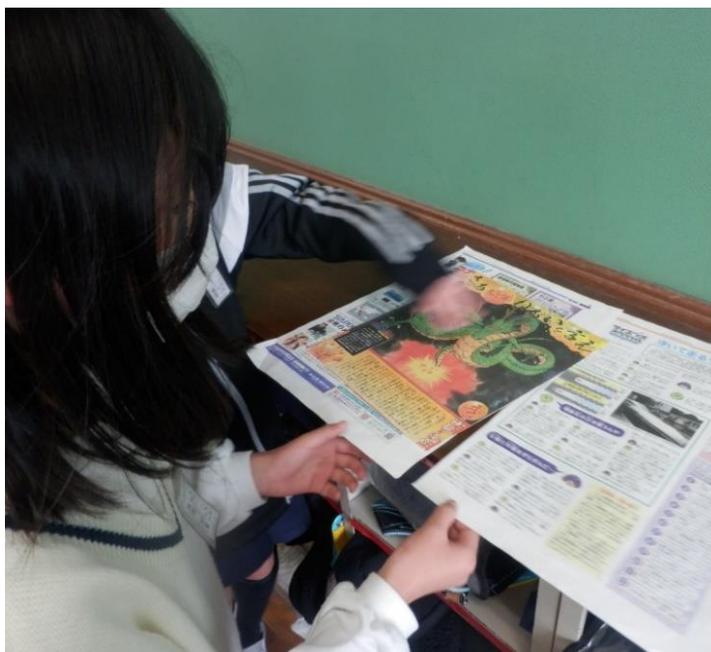


また、新聞離れは子どもたちに限ったことではありません。私たち大人も新聞から離れているのではないのでしょうか。そこで、教職員自身が新聞記事に触れる機会も増やすために職員室の給湯室にある机に過日分の新聞を配架するようにしました。教育に関する記事や教室で子どもに話せるネタになるような記事には、付箋に一言感想を書いて貼っておくようにしました。付箋

の貼ってある別の記事にも目を向けたり、新聞記事をもとに教職員間で話をする機会が増えたりするなどの効果がありました。

○ 子どもの日常生活の中に取り入れる

教室に子ども新聞を配架し、朝の会では日直が気になる記事の一つを選び、記事の内容と感想を一言発表するという活動を取り入れました。この活動を始める前に取ったアンケートでは、新聞を購読していると回答した家庭は学級の約6分の1ほどでした。そのため、子どもたちも新聞の良さや面白さを知らないという感じでした。しかし、毎日少しずつ新聞に触れ、日直が気になる記事を紹介することで、少しずつ新聞記事に興味をもち始める子どもが増えてきました。「次はいつ発行されるの?」「続編はあるのかな。」「こんなことが起こっているなんて知らなかったよ。」「記事を読んでおもしろいと思ったから、今度このことを自主学习で調べよう。」など、新聞を読むことを通して、社会事象への興味・関心を高め、自主的な学びへと深めていきました。



○ 教科指導の中に取り入れる

<国語科での取組>

4年生の「新聞を作ろう」の学習では、様々な新聞記事を見て、新聞の特徴や割り付けの工夫について確かめました。これまでは、2人で1部など、子どもに配布できる新聞の部数が限られていましたが、NIE実践協力校として各紙のストックがたくさん準備できたため、一人当たり2部以上の新聞を配布することができました。2社の新聞を見比べ、どのような見出しになっているか、どのような写真が使われているかを比較し、違いや共通点などをじっくりと調べることができました。

＜図画工作科での取組＞

1年生「やぶいたかたちから うまれたよ」の学習では、いろいろな紙を触り、手触りや特徴について話し合ったり、紙をやぶったりちぎったりしてできた形から、何かに見立てる活動を行います。これまでは、画用紙の切れ端などを再利用しながら活動していたため、どうしても形が制限されたり、手でうまくちぎれなかったりしました。しかし、新聞紙を使うことで、子どもたちは思い思いに何枚もちぎることができ、様々な形を生み出し、イメージを広げることができました。また、紙面の写真や見出しの大きな文字を自分のイメージと重ね合わせて考える子もいました。



3. 成果と課題

(1) 成果

今年度は、子どもたちが新聞記事に触れる機会を増やすことに重点を置いて取組を進めました。ただ新聞を配架するだけでなく、教職員からの新聞記事に関する感想や読んでほしいポイントも一緒に掲示することで子どもたちが新聞を手にする機会と新聞記事をもとにした子どもたち同士のコミュニケーションの機会が増えました。また、上述したように、子ども新聞を日常的に活用させる機会を設けたことで、子どもたちが様々なジャンルに興味・関心をもち、自ら情報を得ようとするようになりました。

(2) 課題

小学生の子どもたちが自ら一般紙を手にとって読み、内容を理解することは、読めない漢字や意味理解が難しい言葉が多いことなどから難しいと感じました。

「読解力」「コミュニケーション力」を育む新聞活用

京都市立神川小学校 教諭 中川 和幸

1. 実践の概要

本校は、令和4年度よりNIE実践校となり、本年度2年目の取組を終えた。「自ら学び 共に高め合い 自分の将来を切り開く子の育成」という学校目標を掲げ、研究に関わる取組を進めてきた。国語科、社会科、総合的な学習の時間、特別活動等を中心に壁新聞作りや、新聞を読んで考えたことをまとめたり、相手に伝えたりする活動に取り組んだ。

昨年度から継続して、職員室前の棚に『新聞コーナー』を設置し、児童が新聞に触れることができるように環境整備を行った。また、NIEの取組についての今後の計画と学年ごとに実践できる内容について実践代表者が校内研修を行い、学年ごとに年間計画を作成した。

その後、教科学習の中に新聞を多くの学年で取り入れることができた。4年生の国語科「新聞を作ろう」、3年生の社会科「商店のはたらき」5年生国語科「新聞を読もう」などの単元で、新聞機能学習ということで、実際の新聞を児童一人一人が手に取りながら、新聞の特徴を確かめ、オリジナルの新聞作りの意欲を高めることができた。

また、各担任が新聞記事で気になった記事を見つけて授業の導入場面で紹介をしたり、朝の会のグループトークの時間に新聞記事の話題をテーマにしたりするなど新聞を積極的に活用しようと取組み、各学年で新聞に親しみ、触れる機会を増やすことができた。

2. 新聞の置き場所と活用方法



児童がいつでも新聞を手にすることができるように職員室前の棚を『新聞コーナー』とした。児童用の机と椅子を置いて休み時間等に児童が新聞に触れることができるように環境整備を行った。

新聞の1面に児童の目に付きやすいように大きめの付箋を貼って、その日の注目の記事が何面にあるか、どういった記事なのかを知らせるようにした。地元京都の記事や時事ネタ等をピッ

クアップし、児童に紹介するようにした。また、過去の新聞をまとめて棚の下に貯めていくようにすることで、授業で活用する際に児童数分の新聞をまとめて利用することができた。

そうした取組を進めることで、徐々に休み時間等に新聞を手にとる児童が見られるようになった。

3. 実践の内容

○新聞づくりの取組

・4年生社会科「使った水のゆくえ」の単元で、鳥羽水環境保全センターに見学に行き、下水をどのように処理をしているのか、働く人から聞き取った内容や自分たちで調べて分かったことや気付いた等を新聞の形式にして書く取り組みを行った。どの文章をどこに書くのか、見出しはどうするのかなどを考えながら新聞を作成した。プリントに新聞を作成する児童やG I G A端末を活用し、ロイロノートで新聞作りに挑戦する児童など様々であった。



○新聞記事を紹介する取組

・昼の帯時間（チャレンジタイム）を活用し、新聞記事の中から自分が興味をもった記事の一つを選び、学級の人みんなに紹介する取り組みを行った。日付の異なる様々な新聞をランダムに手渡し、その中から記事を選んでいった。これまでの国語科「新聞を作ろう」での学習を生かして写真に注目したり、見出しや小見出しの言葉から興味をもった記事を読み進めたりすることができていた。選んだ後には、その記事を切り取り、ワークシートに貼付けた。そして、なぜその記事を選んだのかを紹介する文章を書き、学級の中で交流することができた。



○5年生の取組

・国語科「新聞を読もう」の学習では、新聞の作り方や工夫を知ること、読み方を身につけて、生活や学習の中に生かしていくこと、二つの記事を比べて読み、どんなちがいがあのか、どうしてちがうのかを考えることをねらいとして行った。複数の新聞の1面を見比べて、気づいたこと疑問に思ったことを出し合った。京都新聞・毎日新聞・日本経済新聞の3紙の1面を比べ、同じ日なのに取り上げている記事が違うことや見出しのちがいについて学ぶことができた。



・読売新聞の教育ネットワーク「ワークシート」を使い、新聞の文章からキーワードとなる言葉や自分の感想を持つことを繰り返し練習した。また、取り上げた記事の内容と関連する事柄について、より深く知りたい、考えたいことについて自ら調べる活動を行った。

4. 成果と課題

【成果】

- ・社会の出来事や身近な出来事に興味をもつ児童が増えた。
- ・これから新聞を読んでいこうと意欲を高めた児童が見られた。
- ・興味を持った記事を友だちに紹介することで、読解力やコミュニケーション力を高めることができた。
- ・指導者が資料として新聞を活用することが有効であると考えられるようになり、授業場面での活用が増えた。

【課題】

- ・新聞の内容を理解することが難しい児童が少なからずいる。
(ふりがなを付けたり、解説をしないと理解が難しい)
- ・情報を集めるには、ネットでの検索が一番と考える児童も多く、新聞の有効性・有用性について捉えきることが難しい。
- ・指導者の中で、新聞活用の頻度に極端な差が見られる。

【実践者の感想】

- ・1年目の取組を継続し、さらなる新聞活用を進めていくことを念頭に置いたが、G I G A端末の使用頻度が年々高まってきていることも影響しているのか、学校全体として活用の場面を大幅に変化させることができなかった。新聞を読んだり、読書をしたりすることは、語彙力を高め、読解力やコミュニケーション力を付けていくための有効なツールであることから、次年度以降も授業場面だけでなく、朝の会や帰りの会、全校集会などでも新聞記事を積極的に取り上げていきたい。

国語科・社会科・総合的な学習の時間を教科横断的に

新聞を読み取る力を活用し、表現する力を育む

京都市立羽束師小学校 研究主任 古田 祐子

1. 学校の概要

本校は、京都市の伏見区に位置し、学校周辺には田畑が広がり、川が流れる自然豊かな地域である。児童数 651 名学級数 24 学級、教職員 50 名の比較的規模の大きな学校である。令和 3 年度より N I E 実践校となり、本年度 3 年目になる。学校教育目標を「なりたい自分に向かって学び合いしなやかに 生きる子の育成」と設定し、これまで研究を進めてきた。年間計画の作成から始まり、校長室前の新聞コーナー・掲示板の活用、授業で取り組んだはがき新聞の学年フロアへの掲示、そして帯時間（ステップタイム）に新聞を活用した活動を週に 1 回実施するなど、1 年間を通して各担任がアイデアを出し合いながら取組を進めている。

2. 学校の目指す児童の姿

本校の子ども達は素直で真面目な児童が多く、言われたことはできるが、自分から進んで学習しようという力や、学習したことを使って考えたり自分で選んで使ったりしていく力に課題がある。それを踏まえ、子ども達に各教科で培った力を活用する力をつけていきたいと考えた。グランドデザインの中心に育てたい資質・能力「活用力」と「表現力」、育てたい非認知能力「ねばり強く自己調整する力」を据えている。その一つとして、各教科で学んだ力を新聞に書き表したり、新聞を読み解くことで、自分の考えを深めたりできるのではないかと考え昨年度より活用力・表現力・課題設定力の育成に取り組んでいる。新聞を読むことで読み取る力をつけたり、新聞が身近なところにあることで、子ども達が自ら話したくなったり、対話力や表現力をつけたり、新聞から自分たちの学びにつなげる活用力を育成したいと考えている。

3. 実践の内容

(1) 校内での研修

新聞を活用した授業の工夫について、校内研修を行った。校内で昨年度より実践をしている教員に声をかけ様々な教科での実践を交流し、学校全体でどのような取組ができるのかを考えた。夏休みには、2 学期の目標をはがき新聞で書くために、教職員が一度自分の 2 学期の目標新聞を書く研修を行った。また講師の先生を招いて、道徳科での新聞の活用について研修を行ったり、京都新聞社の方を講師に迎えて研修を行ったりし



た。京都市小学校NIE実践研究会の方から参加者を募って授業研究を行い、全校・全市に発信しながらNIEの取組を進めた。

(2) NIE委員会の開設

新聞記事により親しみがもてるよう、令和5年度より委員会活動の中にNIE委員会を立ち上げた。新聞を各教室前に掲示し、それをクラスで読み合う活動を行っている。またコラージュ新聞を



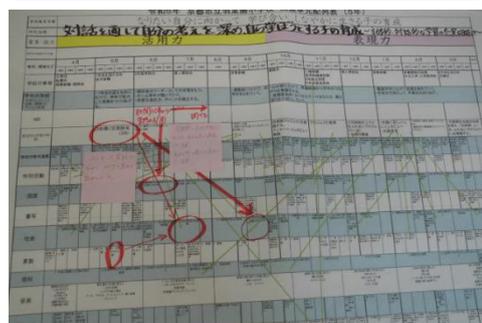
作成し、廊下に掲示することで、子ども達も興味をもってコラージュ新聞を見たり読んだりしていた。身近な友達を選んだ新聞を使って書いたコラージュ新聞には、大変興味を示していた。



(3) 単元配列表

今年度は、さらにカリキュラムマネジメントを意識し、各教科の中で、新聞を使った学習をどこに取り入れるのか学年で学期ごとに話し合った。教科横断的に行えるように、年間計画も新たに作成した。各学年概ね1学期に1単元、年間で3単元、重点的に取り組む活動を設定した。朝の学習や帯時間を中心に、授業の中でも新聞を活用し、新聞に触れ合う時間を意図的に授業へ取り入れている。昨年度取り組んだ「新聞をスクラップしよう」「クラスの係からみんなへ新聞で伝えよう」「日本文化を発信しよう」に加え、「SDGsを進めよう」「社会見学新聞」「歴史新聞」など、各教科でどのような取組ができるのかを考え、学年にあった単元構成で実践を深めていきたいと考えている。

カリキュラムマネジメント



(4) 校内での掲示

子どもたちがいつでも閲覧し、手にとって読むことができる場所として、校長室前に新聞コーナーを設置している。さらに、新聞コーナーの横に掲示板を設置し、複数紙の新聞を読み比べたり、注目される記事を取り上げて掲示したりしている。立ち止まって新聞を読んだり教室に新聞を持ち帰って読んだりする子どもたちの姿が見られた。また、過去の新聞は、各クラスに随時配布し、教室での新聞学習に活用したり、子どもたちが興味をもった記事をいつでも読んだりすることができるようにした。

校長室前の新聞コーナー



4. 実践内容

○学校全体として

本校では、令和3年度より NIE 実践校として取組を進め、各教科で新聞を使った学習を積み重ねている。学校全体の取組として2つ行った。

- (1) 2学期の目標新聞作成
- (2) 運動会での見どころ新聞



(1) については、昨年度も行っている学年もあったが、今年度は、夏休みに教職員がはがき新聞作成についての研修を行い、実際にはがき新聞を作成した。それをもとに、全校で夏休み明けに子ども達に目標新聞を書かせ、教室に掲示した。



(2) については、昨年度まだコロナの影響で、全校で運動会が実施できないことから、各学年の取組を新聞などにまとめ、発信するという取組を行った。各学年での競技について、端的にまとめられていて、参観する保護者の方にも見どころを掲示する良い場となっていたので、今年度も引き続き行った。



○各学年の実践内容

- (1) 5年生での取組

◎総合的な学習の時間において テーマ：命輝く羽束師米

①取材について

自分達で稲を育てて、うまくいかなかったことやもっと知りたいことについて JA の方にインタビューをした。あらかじめ質問項目を決めておき JA の方に答えていただく形にしていた。自分達の興味のあることだったので、一生懸命話を聞くことができた。その後、新聞社の方にゲストティーチャーとして来ていただき、取材の仕方を教えていただいた。



「深める質問」と「広げる質問」があることを知り、友達の今興味のあることについて質問し合った。2回のインタビューを終え、やはり新聞社の方に教えていただいた後に行ったインタビューの方が、より深く農家の人の思いに迫る質問ができていた。考えていた質問だけではなく、子ども達が農家の人の答えを聞きその場でさらに質問することができた。

②新聞にまとめる活動について

インタビューして分かった事、調べて分かった事を最後に新聞にまとめる活動をした。何を誰に伝えたいのかを話し合い、「4年生にもっと羽束師の米作りのことを知ってもらいたい」という思いをもち、同じことを発信したい友達同士でグループを決め新聞にまと

めることにした。どうやって伝えるか子ども達に聞いてみたところ、動画やポスター、新聞という方法があるということになった。4年生の総合的な学習の時間の最後にも様々な方法で情報を発信したが、その時にも「新聞にまとめると分かりやすい」という意見が出て、新聞にまとめた経験もあるので、今回も「新聞」という選択肢は出てくると予想はしていたが、新聞を選ぶ理由として子ども達の中から「動画やポスターでの発表は、一度見たらそれで終わりになるけれど、新聞だと、どこかに貼っておくと何回も繰り返し見てもらえるからいいと思う。」という意見が出てきた。繰り返し新聞を使った活動を積み重ねることでより新聞にまとめる良さに気付く子ども達が増えてきたということを感じた。

③新聞の記事を対話しながらより良いものにする活動について

4年生から社会科や総合的な学習の時間、国語科と何度も新聞でまとめるという活動を行ってきた。ただし、今までは自分でまとめたものを発表するという形式をとっていたが、5年生になってから、自分の書いた記事を友達とのやり取りを通して、よりよいものにしていけるように交流する時間を設けるようにした。自分の2



学期の目標を書いたものや、宿泊学習に行つて学んだことをまとめる活動でも、自分の新聞をより良いものにするために友達と新聞を読み合う活動を取り入れるようにした。友達と読み合う中で、友達の新聞から良い所を見つけ、自分の新聞でも次から使っていこうとする姿が見られるようになった。

④他教科とのかかわりについて

国語科において4年生で「新聞をつくろう」の学習をしている。新聞についてどうやって書けばよいかを、新聞社の方にゲストティーチャーとして来ていただき、見出しの書き方や取材の仕方について教えていただいた。国語科で学んだことを、社会科の「ごみ新聞」や「琵琶湖疏水新聞」にまとめていくことで、少しずつ自分の見出しをより良いものにしていくことができた。最初は、新聞の形式に戸惑うこともあり、うまく一枚に収められずはみ出して記事を書いている児童もいたが、国語科や社会科で新聞にまとめることを繰り返していくうちに、決められた範囲でうまくまとめるにはどうすればよいかを考えるようになった。「長すぎるからもう少し短くしよう」「少し余るから、あと何か書きたいことはないかな」等自分で記事を書くときに、言いたいことを端的にまとめたり、自分が伝えたいことは何かをもう一度考えたりするきっかけになっていたように感じる。5年生では「新聞を読もう」で実際に地方紙と全国紙を読み比べ、同じ記事でも書かれ方が違うということに気付いていた。学校にいくつか新聞が届いているので、実際に同じ記事が書かれている新聞を読みどのように書かれているのかを読んでいる児童もいた。少しずつ、新聞に興味をもち自分から読んでみようとする児童が増えた。また国語科で学習の最後に自分が心に残ったところをはがき新聞に書きまとめる学習をした。初めはがき新聞と伝えた

時には、「短すぎてこの中におさまるように書けないかもしれない。」という声が上がった。その時にも、一度自分で下書きをして、何が一番伝えたいのかを考えるようにすると、自然と自分の書いた分を推敲しはがき新聞の中にどうすればうまくまとめられるのかを一生懸命考えることができていた。また「固有種が教えてくれること」で資料の効果について学習した時には、こちらから何も言わなくても、「新聞と似ている」という発言が出てきて、自分達が総合的な学習の時間でまとめている新聞にも「この資料を効果的に使うということが生かせると思う」と言っていた。

（２）低学年での取組

①帯時間の新聞活用

週に1度、ステップタイムで新聞記事を読み取る「しんぶん」の時間を設定した。記事は、小学生新聞より抜粋し、子どもたちが読み取りやすそうなところや記事の大事な部分から問題を作成し、子ども達に取り組みせる活動を積み重ねた。

②お気に入り新聞を作成

自分のお気に入りの新聞を選びそれをはがき新聞に貼り、どんなところがお気に入りなのかを書く活動を何度も繰り返し行った。

③教科との関連（国語科「楽しかったよ、2年生」）

1年間の学校生活での学習や遊びの中から、頑張ったことや楽しかったことなど、自分が一番心に残っていることを選び、「自分がしたこと」「そのときに思ったこと」「友だちが言ったこと」を詳しく思い出し、新聞にまとめた。出来事の順序を整理し、自分が一番伝えたいことが伝わるように文章を考えた。紙面の大きさは、2学期の「まちたんけん新聞」がB5用紙1枚であったのに対し、3学期は、B5用紙2枚までにまとめるようにした。個人差はあるが、紙面いっぱい1番心に残った思い出を詳しく書くことができるようになっていた。

（３）中学年での取組

①朝読書での取組

3学期からタブレットでデジタル新聞を読む活動を行った。記事を書いたワークシートやデジタル新聞(タブレット活用)を読み、ワークシートに「わからない言葉を国語辞典で調べ」「記事からわかったこと」「思ったこと」を書くという活動を積み重ねてきた。「語彙力を高める」「記者は何を伝えたいのかとらえる」「自分の思いをもつ」というこの3つを大切に取組んだ。

②「はがき新聞」の活用

社会科等で学習してわかったこと・知ったこと、考えたことを短くまとめ、相手意識をもってはがき新聞で表現する活動を繰り返した。社会科だけでなく、他の教科でのまとめにも取り入れた。



③総合的な学習の時間での新聞活用

導入で地域とのつながりを新聞記事から知り、記事に込められた思いをもとに、実際に人と出会い、見学やインタビューをしながら学習を進めた。

5. 成果と課題（成果○課題●）

○一年間を通して、子ども達が自分の周りに新聞がある環境が当たり前になり、新聞を読むことが増えた。はがき新聞を書く活動を学校全体で行ったことで、自分の思いをはがき新聞の中に収まるように表現することに慣れ、自分で何を書きたいのかを考えたり、必要な情報だけを書こうとしたりする児童が増えた。繰り返し新聞に書く活動を行うことで、書く力がついてきた。

○新聞を読むことで子ども達の語彙力を少しずつつけることができた。

○読んだことをもとに書くことで、記事から何が伝わってきたか整理することができた。自分の思いをもつことで、思考力をつけることができた。

○はがき新聞や分かったことや考えたことを新聞にまとめて表現することで、新聞を読むだけでなく、発信する側として、児童の意欲を高めることができた。また発信するために、相手のことを意識しながら、見出しを考えたり記事を書いたりすることができた。

○新聞を扱うことに少し抵抗があった教員も、少しずつ取組を進めていく中で、子ども達が楽しんで新聞を作成したり、読んだりすることができるようになり、難しく考えなくてもできることがたくさんあるということに気付き、さらに取組を進めていこうとする教員も出てきた。学校全体で取組を進めてきたので、学年の枠を超えて話をしたり、相談に乗ってもらったりと職員室での会話の一つになっていた。

○掲示している新聞やスクラップ新聞から身近な社会や世の中の出来事に関心をもつ子どもが増えた。

○教員が資料として新聞を意識できるようになり、研修を重ねることで授業での活用の幅が広がった。

●低学年では、ふりがなをつけても新聞の内容を理解することが難しい子どももいる。

●活動内容によっては、子どもの意欲を高めにくいものもあった。資料教材等の選定が大事である。

●新聞記事を読む際、興味がある分野から読むので、幅広い知識を得るところまでには至りにくい。

ここ数年、学校全体として実践を重ねていくうちに、教員の中でも新聞に興味をもつ人が増え、自分から新聞を活用した取組を行っていこうとする教員が増えてきた。これからの社会を生きていく子ども達は、多様なテキストを読み取り、たくさんの情報の中から必要な情報を取捨選択し、自分で発信したり伝達したりしていく力が必要である。そのためにも、新聞を活用して、様々な情報に触れ、読み取る力をつけていくことが必要であると感じた。学校全体で、新聞が身の回りにたくさんある環境を今後も継続し、子ども達の読む力や表現力を育てていけるようにしたい。

デジタル時代におけるN I Eを通じた「国語科」の実践

京都市立西京高等学校附属中学校 教諭 矢倉 裕也

1. 実践の概要

本校は、『進取・敢為・独創』の校是の下、エンタープライズシップにあふれた、未来社会をリードし創造する人材を育成する」ことを教育理念として掲げている。

特に本校では、E P-A(総合的な学習の時間)での中高6年間に及ぶ体系的な探究活動を行っている。また、次世代教育構想として「C R e D i」というキーワードがあり、「Creativity (新時代に求められる価値を創造する姿勢)」、「Responsibility (自己と集団の未来に責任をもつ姿勢)」、「Diversity (多様な社会の調和を希求する姿勢)」の略称である。

ここ数年における教育業界は大きな過渡期にある。G I G Aスクール構想における1人1台タブレット端末の導入や、生成A Iを活用した授業など、「デジタル」はもはや「学習環境」として位置づいている。

また、子どもたちが生活している現代社会は必要な情報を簡単に得られる時代となった。そのような子どもたちに、「新聞」という媒体を用いて効果的に国語の力をつける実践研究を行っていく。

今回の研究における付けたい力を「必要な情報を精選し、対話を通して読みを深める力」と位置づけ、「国語科」として様々な取り組みの実践を行う中で最終的に、文学作品における読解力の向上を目指す。新聞を活用しながら作品や他者との対話を通して、「国語の学び」の再発見に繋げることをねらいとする。

2. 新聞の置き場所と活用方法

本校は、2023年、2024年にN I E実践校の指定を受け、新聞を用いたさまざまな実践を継続して行っている。日常的に新聞に触れる仕組みとして、職員室横に生徒が作成した「N I Eボード」の設置がある。生徒が毎週気になる記事を選択し、自分の考えとともに掲示している。

また、「京都七不思議」と題して、京都新聞社の読者から寄せられた疑問に対して取材した記事を掲示し、「あなたの京都の疑問」を募集した。「地下鉄はなぜ東西線と南北線ではなく、東西線と烏丸線なのか。」「なぜ清水寺の前は長い坂になっているのか。」など全ての学年から多くの素朴な疑問が寄せられた。集まった疑問は京都新聞社に提供した。

さらに、本校では紙媒体だけでなく、「京都新聞デジタル版」「日経電子版」「朝日けんさくくん」「ヨミダス for スクール」の4媒体の電子版をタブレットで使用できる環境にある。それらを教科学習や総合学習において常時使用できるようにしている。また、「デジタ

ル新聞のすゝめ」という使い方ガイドを配信し、スクラップ保存や印刷の方法を生徒や教職員が一目で分かるようにしている。

この結果、生徒たちも新聞という媒体に常に親しんでおり、気になることがあれば、すぐに新聞で検索するようになった。

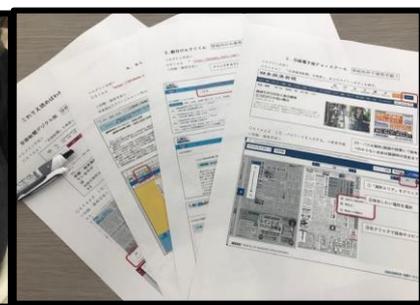
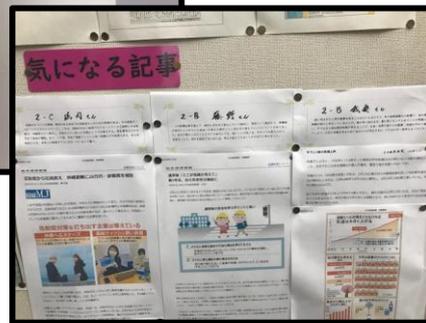


生徒に「あなたの京都の疑問」を募集。

多くの素朴な疑問が集まった。



生徒が自主的に「気になる記事」を選び、自分の意見(100～200字程度)を添えて提出している。



職員室横の自由スペースに常時紙媒体の新聞を置いている。

デジタル新聞の使用も、ネット検索と同じように日常化している。

スクラップの方法などを新聞社毎にまとめている。

3. 実践の内容

【実践1】新聞記事の「読み方」を捉える授業—日経電子版オリジナル番組撮影—

新聞記事を目に触れる機会が増える中、新聞記事の「読み方」について指導する必要性を感じた。グラフや表が多く用いられている教科書掲載の説明文『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」の授業を行った後、新聞記事を分析し、特徴について考えた。

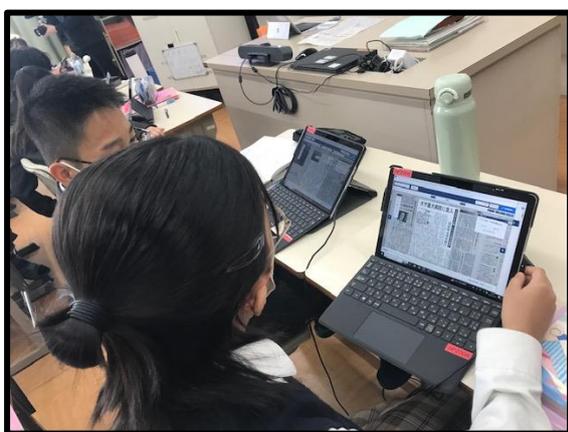
具体的には日本経済新聞社デジタル版の記事「オーバーツーリズム回避策は 目的地分散化へ情報提供」を用いて、文章の構成や展開を分析した。

どのような順番で記事に目を通すか、限られた時間の中ではどこに着目するかなどを共有した後、検証の目的、筆者の主張や根拠、検証方法、仮説、結果などを分類した。生徒は、「見出しやグラフに目を通してから記事を読むことで内容理解が速く深くなる」ことや、「文末に注意して読むと重要なポイントがわかる」などの気づきがあった。

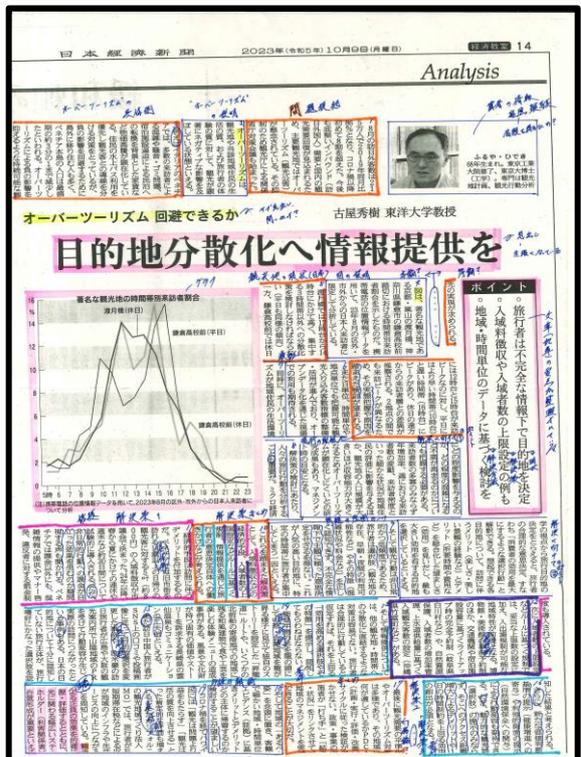
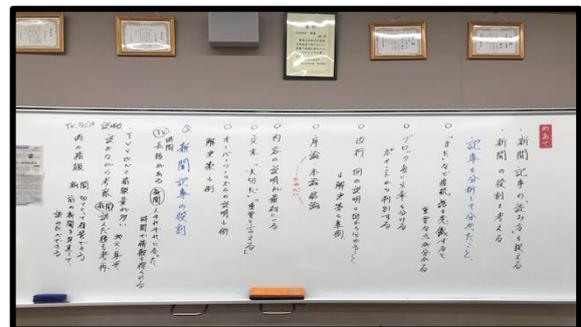
最後に新聞記事はどのような特徴があるかを考えた。生徒からは、「説明文は長年に渡って研究してきた結果が述べられているが、新聞は即時性と客観性のバランスが良い」という意見や、「新聞は過去の記事を見直して読み比べできたりできる」などの意見が挙がった。



それぞれ新聞記事を分析してわかったことを共有している様子。



直接PDFに書き込みながらどこにどのような情報が記載されているかを可視化している。



日本経済新聞 朝刊 2023.10.9.

【実践2】新聞を通して作品の読みを深める授業—京都新聞社の取材—

1年生の授業において、貫戸朋子さんの随筆作品『マドゥーの地で』を教材に扱った。「文学作品(随筆)を学習することにおいて、新聞記事を参考材料として読むことが、文学作品の読みを深める」ことを本授業のねらいとした。

<第1時>

事前に教材を読むように指示し、まず、筆者の行動につながる考えや心情を確認した。次に、筆者がなぜ国境なき医師団で働くことを決心したのか、活動の始まりときっかけを理解させた。最後に、次回は筆者の考えや心情を読み取るために、新聞記事を用いて作品の背景を考える活動を行う旨を伝えた。

<第2時>

この作品の背景を知れる新聞記事を4種類のデジタル新聞から探し、スクラップした。その後調べた記事を一文要約〔「□□という内容の新聞記事を通して●●だと思った(考えた)。〕という形式を設定した上で、グループで共有した。

<第3時>

この時間は「最後の2行に込められた思い」というテーマのもと、300字程度(400字以内)でロイロノートに記入させた。また参考にした記事も添付して提出させた。

その後、ロイロノートを用いて共有した後で、気になるクラスメイトの記事について一人1つつコメント(共感・反論・質問)をした。



作品の背景理解を深めるための記事を自ら探し、共有している様子。

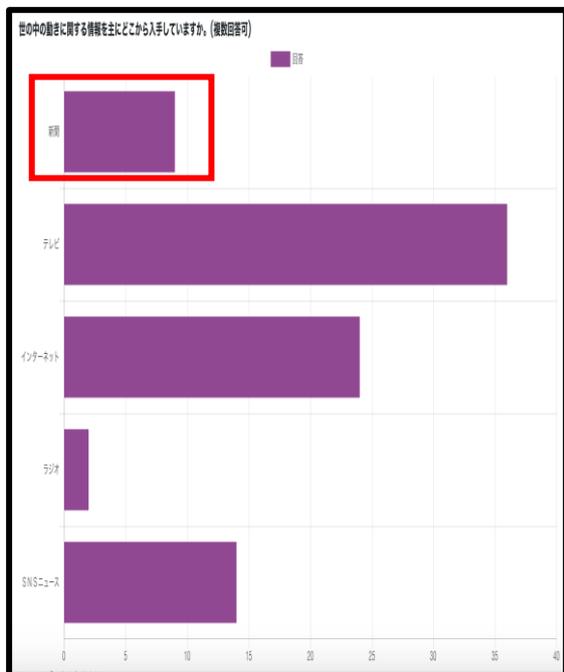
新聞記事から得た情報も踏まえて、最後に自分の考えをまとめ、発表し合った。

4. 成果と課題

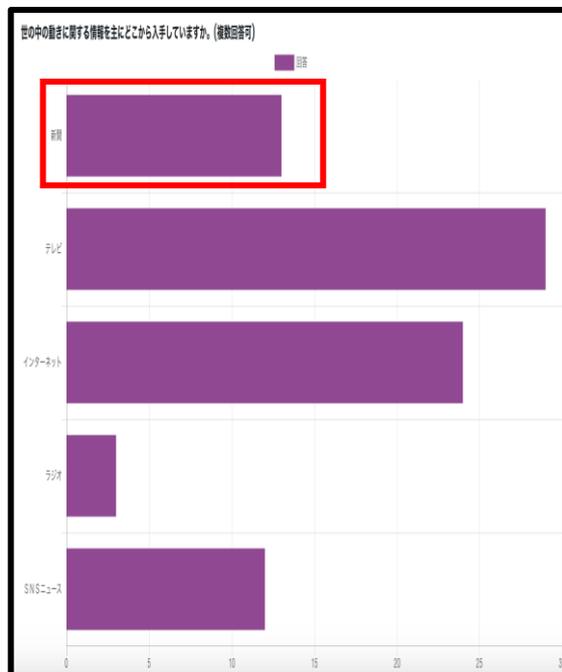
【成果】

- ・ 中学1年生4月と2年生4月にとった生徒アンケートによると、情報を得る方法として、「新聞」が選択肢に入る割合が増えている。

<1年生4月のあるクラス>

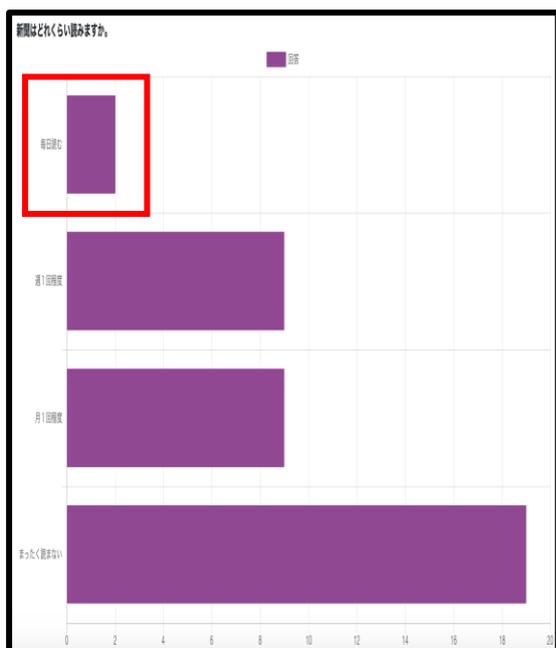


<2年生4月のあるクラス>

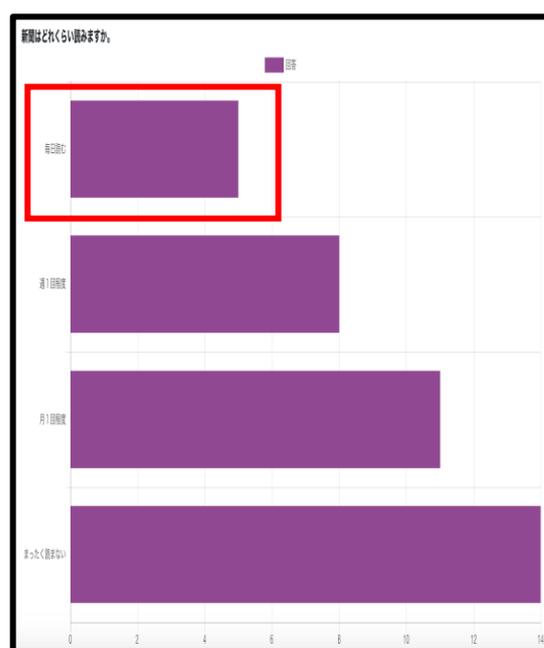


- ・ 新聞を読む頻度も増えていることがわかる。

<1年生4月のあるクラス>



<2年生4月のあるクラス>



- ・国語の授業以外にも、社会科や総合的な学習の時間などにおいてもデジタル新聞を検索している生徒も少しずつではあるが、増えてきている。

【課題】

- ・NIEコーナーに置いている紙媒体の新聞を手にする生徒は増えたが、特定の生徒が読むことが多く、学校全体としてまだまだ拡がりを見せていない。
- ・速報性や信頼性の高さなど新聞記事の良さを実感している生徒は多いものの、日常的に「新聞を読む」という習慣化までは至っていない。

【実践者の感想】

今年度、NIE実践校、全国大会発表校として紙新聞の拡充、デジタル新聞の導入を通じた新聞を活用した授業実践を行ってきた。生徒が主体的にスクラップ記事を提出したり、情報の収集の際に新聞記事を調べたりする様子から、新聞が生徒にとって一定身近な存在になったことが伺えた。しかし、活字離れも進んでいるせいか、「新聞を読む」ことで情報を得ることが習慣化するところまでは至っていないのが現状である。来年度はより積極的に新聞を活用した授業を行いながら、生徒に新聞の魅力を伝えていきたいと思う。



NIE（教育に新聞を）全国大会京都大会が8月1、2日に京都市内で開かれるのを前に、京都と滋賀の学校の実践を紹介します。

西京高付属中
(京都市中京区)

随筆に込められた
思いを読み取る

随筆に込められた著者の思いをより深く読み取る。国語の授業で扱う作品の背景の理解に、新聞が役立っている。
2月下旬の授業で取り上げられたのは、京都市出身の医師・貴戸朋子さんが、国境なき医師団の一員として派遣されたスリランカでの出来事をつづった「マドゥーの地」で。1年約40人は印象に残った文章や著者の心情を強く感じた場面を話し合った後、各自のデジタル端末で新聞4紙のデジタル版やデータベースを活用し、「国境なき医師団」や「紛争」などのキーワードで検索した。
パレスチナ自治区方サで活動す



国語の授業で随筆作品の背景となる情報を新聞記事で調べて発表する生徒(京都市中京区・西京高付属中)一撮影・山本陽平

作品背景 記事で深掘り

国境なき医師団の記事を読んだ清水唯音さん(13)は「戦地の深刻さが伝わってきた。新聞は世界の出来事を、一人の主観ではなく客観的に伝えていてと思う」と話した。
生徒たちは、学校の魅力を先生や先輩に取材して新聞記事のようにまとめたり、関心を持ったデジタル記事に自分の考えを添えて校舎内に掲示したりする取り組みも進める。担当の矢倉悦世教諭(34)は「新聞には多様な視点で国内外のニュースが掲載されている。自分を磨くために主体的に活用してほしい」と期待する。
(河北健太郎)

中学校 国語科・社会科・総合的な学習の時間
「スクールGIGA構想・DX(デジタルトランスフォーメーション)」との共存を目指して

京都市立小栗栖中学校 校長 今津 敏一

1. 本校の概要

本校は令和7年4月に、小栗栖中学校・小栗栖小学校・小栗栖宮山小学校・石田小学校の4校が統合して、新たに京都市立栄桜（えいおう）小中学校として義務教育学校となる学校である。（小栗栖小学校と石田小学校は令和4年度に一次統合済み）

醍醐地域初の義務教育学校の設立に向けて、新たな取組を行っているが、小栗栖中学校は昭和51年4月に醍醐中学校の分校として開校し、当初は生徒数310名の中学校であったが、団地の建設に伴い人口が増え、最大1000名を超える大規模校へと発展していった。しかし、時代と共に高齢化も進み、現在は生徒数223名となり、令和7年度義務教育学校になって1年生から9年生までの総数で600名前後の児童生徒数で開校する予定である。

2. 実践の概要

小栗栖中学校は私が赴任した際は、図書室に1社の新聞が置かれており、昼休みに図書室に来室した生徒は見る機会があるというものであった。令和3年度に、3年生が修学旅行に向けた取組の中でSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）について学習した際に、京都文教大学こども教育学部の橋本祥夫教授にご指導をいただく機会があり、新聞に対しての一つの転機となった。令和4年度・5年度にNIEの指定をいただき、いかにして生徒に新聞と関わる機会を作るかを模索してきた。

一つの指針として行った全学年の生徒に新聞を定期購読している家庭を調査では、学校としては13%に過ぎないことが分かった。

生徒の新聞に対する意識の向上が2年目の大きな目標となった。

3. 実践の内容

（ア）新聞に親しむ

廊下のスペースに京都府の高等学校のポスターを貼りだし、進路について考えたり、自主的に学習したり、教員と談笑することができるスペースに、配達された新聞を常置することとし、いつでも生徒が手に取って読める環境を作り、学校だよりやホームページでも紹介した。



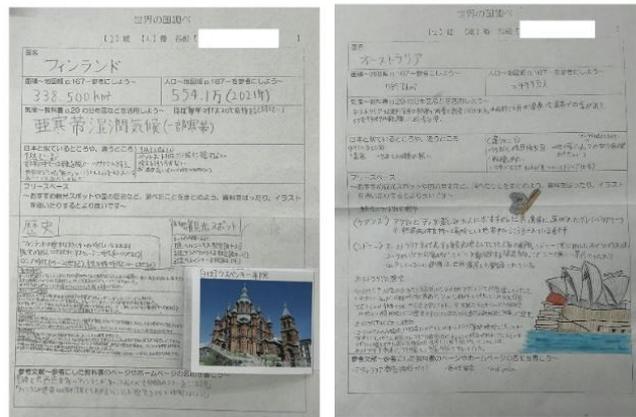
2年目からは英字新聞や中学生新聞のようなものも合わせて閲覧できるようにしたが、生徒の様子は大きく変化することはなかった。それは年度末のアンケート調査の結果からも確認できた。

3年生の校舎にあるということが一つの要因であることは、全体では17%の利用率ではあるものの3年生に限れば33%と進路に関する情報を得るために訪れた際に手にした生徒がいたことと、中にはこの場所を自分の居場所のように休み時間によく見かける生徒が存在したことは成果とも考えられる。



(イ) 社会科での取組（1年）

1年生の社会科の授業で「世界の国調べ」という課題で自分が興味をもった国に対し、気候、日本と似ているところと違うところ、おすすめスポットなどをまとめる際に、見た人が興味をもつ工夫を各自で行うことに焦点を当てた。1年生ではまだまだイラストや写真を利用することで注目をひくような傾向がみられた。小栗栖中学校としてはどの取り組みでもそうであるが必ず廊下に貼り出して同学年だけでなく他学年の生徒も見ることができるような環境を作るとは統一して行った。



(ウ) 総合的な学習の時間での取組（2年）

本校では、総合的な学習の時間を「共創（きょうそう）」の時間とし、多くの人と協働し、新たな自分を創造することを目的としている。2年生は1年生の時に経験したことをもとに、職場体験の報告、高校訪問の報告、来年度の修学旅行の調べ学習としての「富士山」をテーマにしたまとめを行い、来年度実施する修学旅行に向け取組を始めている。まず職業体験の報告については1年生にも来年度に向けて伝えるという意識をもった作品となり、文字で表現しながら挿絵を加えるという1年間での成果が見られた。実際に体験したことを表現することは生徒にとってはまとめやすかったように思われる。



にしたまとめを行い、来年度実施する修学旅行に向け取組を始めている。まず職業体験の報告については1年生にも来年度に向けて伝えるという意識をもった作品となり、文字で表現しながら挿絵を加えるという1年間での成果が見られた。実際に体験したことを表現することは生徒にとってはまとめやすかったように思われる。

同じく2年生で行った高校訪問での発表は実際にその高校を訪れ、感じられたことをまとめるという作業が、職場体験に続いてのものであったため「いかに相手にわかりやすく伝えるか？」ということを意識することができた。

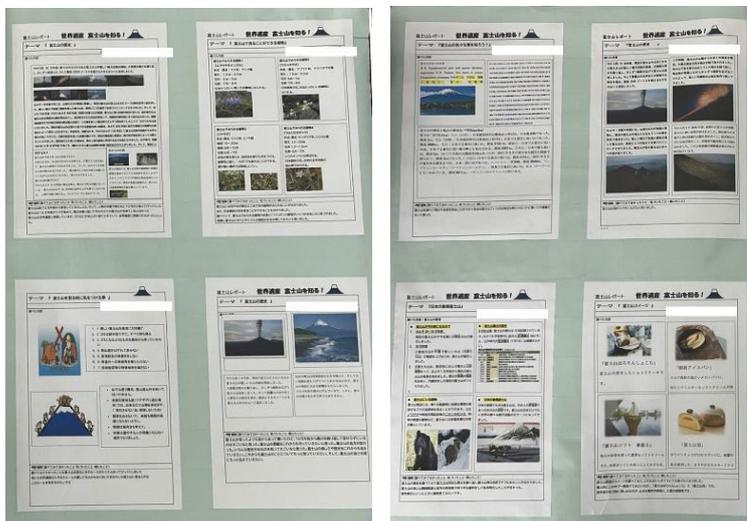


加えて、経験値からポスターセッションをしても、説明の仕方や質問に対する回答や、その質問を受けて次の説明では自分の説明がバージョンアップする姿など成長の跡が見られた。

やはり自分の目で確かめてきたことは質問に対しても自信をもって回答していることから、後輩にも受け継いでいくことが必要である。

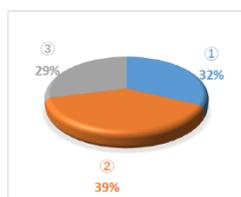
こちらも2年生であるが、来年度の修学旅行に向けた取組である。こちらはこれを使って同じ学年の違うグループに説明をするためのものであるが、ワクワク感からか随分と力が入ったわかりやすい内容となっている。回を重ねるごとにまとめ方や見せ方に工夫がなされている。

楽しい修学旅行につなげて欲しい。



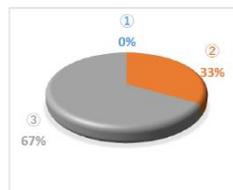
4. 成果と課題

1 読書は好きですか



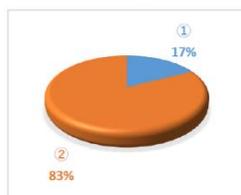
- ① 好きである
- ② どちらかといえば、好きである
- ③ どちらかといえば、好きではありません
- ④ 好きではありません

2 新聞を読みますか



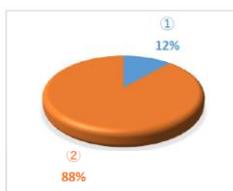
- ① 毎日読んでいる
- ② 週に1~3回程度読んでいる
- ③ 月に1~3回程度読んでいる
- ④ ほとんど、またはまったく読まない

3 家で新聞を購読していますか



- ① 購読している
- ② 購読していない

4 学校の新聞コーナーで新聞を読んだことはありますか

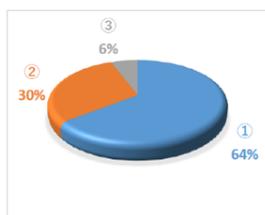


- ① 読んだことがある
- ② まだ読んだことはない

2年間取り組んできたなかで、年度末に生徒アンケートを実施した。急激に大きな変化は見られず、新聞購読に関しては少し上昇していたが、実際に新聞のコーナーを利用した生徒も学校全体を見ると大きな伸びは無かったのが現状である。

ところが、定期考査の文章で書く問題に関するアンケートをとってみると、国語の

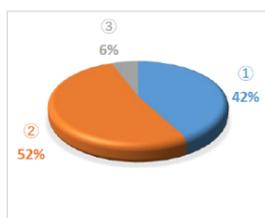
6 国語の定期考査、解答を文章で書く問題がありました、どのように解答しましたか。



- ① 全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した
- ② 書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりしたものがあった
- ③ 書く問題はまったく解答しなかった

問題に関しては最後まで回答しようとしたり、自分なりに努力したりする生徒が60%を超えており途中まででもの結果を加えると94%と頑張る姿勢が見られている。ただし、数学においては42%と、まだまだ低い数値であり、これも「慣れ」からきているのかと思われる。数学でも積極的に取り入れることで、自分の言葉で表現する力を身につけさせたい。

8 数学の定期考査で、解答を文章で書く問題がありました、どのように解答しましたか。



- ① 全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した
- ② 書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりしたものがあった
- ③ 書く問題はまったく解答しなかった

また、次のような問いに関して

「次の人やものから見たり聞いたりしたニュースは信じられますか。信じられるものを選んでください。(複数可)」

- 友だち 家族 先生 スマートフォン テレビ 新聞
- SNS (LINE, X(旧 Twitter)) インスタグラム

圧倒的にスマートフォンと思われたがその割合は50%に過ぎず、最も多かったのが、家族の78%、続いて友達の73%となった。新聞も31%あり、まだまだその信頼性は充分に感じられる。

しかし、学校での授業ではコロナの影響もあり、急速に普及したGIGAスクール構想に始まり、昨今は教育のDX(デジタルトランスフォーメーション)として、デジタルへの変革が必要とされている。

この2年間取り組んできたことと相反する部分もあるが、これからの時代に即していく中で、決して生徒自身も何でもスマートフォンからの情報を信じているとは言えないこともアンケートから見えてきているだけに、これからも継続して新聞の重要性や価値を、すぐに手にとって活用できる教材として提供しつつ、各教科で積極的に取り入れているタブレットとの共存が絶対的に必要になってくる。

最終的な目標を「生徒が授業を変える」とし、令和7年度開校の栄桜小中学校の学校教育目標として予定している「未来を創る花が咲く」を目指し、教育DXとして「データやデジタル技術を活用した教育を行うことで、学習のあり方や教育手法、教職員の業務など、学校教育のあらゆる面において変革を行うこと」を新聞の力も借りながら実現したいと考えている。

「正解のない問い」と向き合う

綾部市立八田中学校 教諭 船越 寿子

1 はじめに

舞鶴市へと続く国道沿いの丘陵地に校舎が聳え立つ本校は、のどかな田園風景の広がる里山に囲まれ、四季折々の自然の移ろいを感じられる場所に位置する。

八田中学校の子どもたちは、当たり前のことを当たり前でできる真面目な気質で、優しく穏やかである。1人だけ目立つことを嫌う傾向にあるが、みんなと一緒に活発に話し合い、協力して取り組めるところが大きな特徴である。

前任校では、NIE 実践校、準実践校を経て5年間、新聞記事を通して子どもたち同士がつながり、自分の考えを発信できるよう実践に取り組んでいた。その経験は、異動後も私にとって大きな支えとなり、自身の担当教科において、スピーチや人権作文、小論文の題材を新聞記事から選ばせたり、新聞へ投稿したりすること等、新聞を活用することを意識的に行なってきた。本校に赴任して2年目、昨年度、NIE 全国大会京都大会での実戦発表を依頼されたことがきっかけとなり、再びNIE 実践校として取組をスタートさせる機会をいただいた。

2 実践内容

(1) 準備段階

本校は、全校生徒66名であり、特別支援学級を除けば、全学年単級である。私は、前任校で取り組んでいた「オピニオンタイム（自分が気になる記事を1人1分で紹介するグループ活動）」をそのまま取り入れようと、年度当初、研究推進委員会の中で提案したが、全校一斉に行うとなると、新聞の数が足りないこと、新聞の置き場所が定まらないことが課題として挙がり、生徒がスムーズに活動できないと判断し、3年生のみ（18名）実施することになった。

3年生においても、4月からいきなり始めるのではなく、まずは「新聞」を手にとらせ、慣れることから始めることにした。3年生には、朝読書と「オピニオンタイム」を「朝活」と位置付け、ねらいと身に付けさせたい力について丁寧に語り、生徒からの質問に答えた。（資料1）

新聞の置き場所は、気兼ねなく出し入れできるように教室前方とした。毎日、最新の新聞を置く際に「新聞で一す！」と意図的に声を出して置くようにし、生徒たちに「教室に新聞が毎日届く」ことを意識付けた。

予想外だったことは、読書を好まない生徒の方が新聞を手取る傾向にあったことである。朝読書の時間に新聞を読むことも許可していたので、読む本が見つからない生徒や読書に集中できない生徒は、新聞を選んで読んでいた。声をかけると、「新聞の方がリアルタイムで起きていることだから、興味を持てる」「読み切りだから」と新聞を読む理由を教えてくれた。

(2) 「オピニオンタイム」

修学旅行や1学期の期末テストを終え、学校生活に少し余裕ができた7月に「オピニオンタイム」を開始。生徒がイメージしやすいように、担任と私の2人で、実際に新聞記事を選び、1人1分で紹介し合う姿を見せた。タイマーの1分を知らせる音と同時にプレゼンが終了すると、生徒からは「おお〜。」という感心の声上がり、「1分も話せるかな。」「絶対時間足りないな。」など、さまざまな反応があった。

話す時のポイントは、あらかじめ記事に線を引くことと、線を引いたことにプラスして、自分の考えを述べると良いということを指導した。また、本番までに1分で話せるかどうかを自分で確認するようにしたことで、何度も練習する生徒も見られた。



「新聞記事を選ぶ様子」



「選んだ記事を切る」



「話すポイントに線を引く」

「オピニオンタイム」のグループは、生活班（4～5人）で分け、担任がタイムキーパーとなって進める。紹介をする順番を決めたら、「よーい、スタート」の合図で各グループが一斉に始める。仲間がどんな記事を選んだのか、生徒は興味津々で、食い入るように話し手の示す記事を見つめていた。

全員が紹介し終わったら、誰の選んだ記事について「もっと話したいか、聞きたいか」の観点で1人選び、「せーの」で相手を示して得票数の多かった人の記事について、フリートークのような形で質問や感想、気付いたことを話し合わせる。



「記事を紹介する様子①」



「記事を紹介する様子②」



「『せーの』で示す様子」

最初は、時間を気にするあまり、話している内容について意識が向かない様子も見られたが、回を重ねるごとに、記事のポイントを明確に示し、自分の考えを端的に伝えることができるようになった。また、フリートークでは、記事を紹介した仲間に共感を示したり、わからない時は「どういうこと？」と熱心に尋ねたりするなど、和気藹々と素直な自分の思いを交流する姿も見かけるようになった。

生徒たちは、「オピニオンタイム」を通して、普段の学校生活では見られない仲間の新たな一面が発見できる楽しさも見つけたように感じた。

(3) ペタペタプレゼン（私・僕の3大ニュース 2023）

冬休みを迎える前に、継続してきた「オピニオンタイム」のまとめとして、7月から12月までに集めた記事を振り返り、共通点や特徴、気付いたことなどを分析し、最も心に残ったニュース（記事）を3つ選ばせた。八つ切り用紙に記事を糊付けし、タイトルと分析したことをまとめたものを資料に、各グループに分かれて発表する。完成した作品は、後日、他学年にも見てもらえるように廊下に掲示した。

3年生は、仲間の選んだニュースが気になり、掲示した直後から、じっくり読む姿が見られた。しかし、1・2年生はあまり興味を示さなかったように感じる。



3年生は、約半年間の取組を通して、新聞が相手（仲間）の考えやものの見方を知る手段の一つであることを理解していたのかもしれない。

「オピニオンタイム」は2学期で終了しようと考えていたが、新聞を読むことが習慣化し、仲間との交流を楽しんでいる様子から、3学期も継続して行うことにした。

(4) 3年生国語「誰かの代わりに」(光村図書)より

3年生の国語の教科書に掲載されている鷺田清一さんの『誰かの代わりに』という論説文を読み、生徒から挙げた疑問を集約し、グループで話し合いを進めながら、「自立とは?」「人間の弱さとは?」という“正解のない問い”について仲間と語り合う授業を行なった。授業の最後に、学習を通して考えたことを文章化し、京都新聞社の「窓」へ投稿する。

授業の導入部分で、新聞は、新聞記者の方が読者にニュースを伝える欄だけでなく、読者が考えていること、感じたことを伝える欄もあることを実際の投稿記事を用いて伝えていた。

“正解のない問い”について、とことん話し合ったこともあり、生徒たちは黙々と自分の思いを言葉に紡いでいった。

老若男女問わず、一人一台スマートフォンを持つことが当たり前となった社会と同じように、学校でタブレット端末が一人一台貸与されたことで、「調べる」という行為が以前よりも手軽になった。世の中は“正解”をすぐに求める風潮だが、“問い”によっては、一人ひとり答えが違って良いものもたくさんある。国語の授業では、同じ教材文を読んでも、解釈の仕方や感じ方が違う仲間がいるということを知り、自分とは違う意見の人に、どのように考えを伝えるか、伝える工夫を凝らす点に、新聞記事を継続して読んできた力が試される。

頭を悩ませ、何度も推敲して書き上げた生徒の文章は、中学生として一生懸命生きる軌跡が見えるようだった。「国語科通信 特別号」として、全生徒の文章を載せ、仲間一人ひとりの考えを共有した。

3 実践のこれから

(1) 特別講師として

卒業を間近に控えた3年生に、これからも新聞を読み続けてほしいという願いを込めて、新聞の持つ魅力について、実際に新聞を作られている方に話してもらうことにした。京都新聞社より読者交流センター長の石崎立矢さんに「情報社会を生き抜き、楽しむ道具に」と題し、ご講演いただいた。

取材の時に意識されていることや記事を書く際に大切にされていること等、新聞を読んでいるだけではわからなかった作り手の思いを知ること、新聞をより身近な情報手段として感じられた生徒が多かったのではないだろうか。



「ペタペタプレゼン」の中で、「記事から知るきっかけとなった」「普段あまり目を向けないことが書かれていた」など、新聞を読んだからこそ得られた情報があると分析していた

生徒がいる。ネットニュースは、見出しで出来事を知ることができるが、自ら得ようとしなければ、それ以上の情報を得ることは難しい。新聞1部の中に約200個の情報（ニュース）が詰まっていると知った生徒たちが、これから生きていく上で、新聞を手取る時は必ず来る。紙媒体の新聞の魅力を知っている大人が、子どもたちの未来へつなぐための種まきをすることが、これからの時代にはますます必要となると感じた。

(2) 2年生へ

2学期の校内研修で、3年生の「オピニオンタイム」の取組や様子について紹介すると、「オピニオンタイム、面白いね!」と声をかけられた。その言葉が嬉しくて、3年生が卒業する前に、2年生へと「オピニオンタイム」を引き継ぐことにした。代表グループがいつもの活動を2年生の前で披露するのである。教員から発信すれば早いですが、継続して取り組んできた3年生の姿を見せることによって、2年生の関心を引き出し、3年生自身にも身に付けた力を実感させたかった。

いつもの和気藹々とした雰囲気です、というわけにはいかなかったが、およそ



1分で流暢に記事の内容と自分の考えを話す3年生の姿に、2年生は静かに聴き入っていた。

4 おわりに

これまでNIEの実践に取り組んできた上で大切にしてきたことは、その時の自分にできることを一つずつ積み重ねていくことである。頑張りすぎると長続きしないので、小さなことからスタートさせることが定着への第一歩だと思う。NIEは、継続してこそ力が発揮される。幾通りもの方法があり、どんな教科、領域でも活用することができる。それこそ、正解はないのである。だからこそ、始めた取組は、途中でやめず、まずは1年間続けたい。その上で、より効果的な方法へとアレンジしたり、より楽しめるように工夫したりしながら、その学校独自の実践へと昇華させれば、人が変わったとしても、必要な教育活動として残り続けるのではないだろうか。

八田中学校での実践は、始まったばかりだ。これからも、全国各地における他校の実践やNIEアドバイザーの先生方、諸先輩方が築いてこられた実践活動を参考に、できることを取り入れながら進めていきたい。

新聞を活用した 主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究

宮津市立栗田中学校 教諭 塩見 優真

1. 本校の実態

本校では、「未来を生きる心身ともにたくましい生徒の育成」を教育目標とし、「新聞を活用した主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究」を令和5年度の研究テーマとして掲げて、教育活動を進めている。

生徒は、豊かな自然の中で、伸び伸び過ごし、学校行事や様々な活動においても意欲的に取り組むことができている。

しかし、少人数での生活が続くため、人間関係があまり変わらず、多様な考えが出にくい実態がある。さらに、世間で起きていることに対して、関心が持てず、視野が広がりにくい状況で過ごしている面も見られる。

目的

- ・日常生活や学習の中で、生徒の「ことばの力」の育成を図る。
- ・社会に対するものの見方を広げたり、記事（意見）に対する自分の考えを述べさせたりする力（表現力）の育成をめざす。
- ・考えを深めさせるとともに、お互いを認め合い、主体的に情報を発信する力の育成を図る。

2. 新聞の置き場所と整理方法

各学年フロアに NIE コーナーを設け、廊下で手軽に新聞を手にすることができる環境を整えた。

委員会の生活図書委員を中心に新聞を管理し、図書室を保管する場所として設定している。

本校は NIE の実践年数は3年目になるが、昨年度新聞コーナーに立ち止まって新聞に目を通す生徒が減少してきていた。そのなかで、委員会の生徒が興味を持ちそうな記事や、目にしてほしい記事が載っている面を表にした状態で置くようにしたことで、手に取って記事を読む生徒が増えてきた。



(2) 委員会活動での取組

図書委員を中心に新聞を活用した取組を行った。図書委員会主体で『図書委員おすすめ新聞記事』を実施した。各学年フロアに設置されているNIEコーナーの新聞を読んで、興味を持った、他の人に知らせたいと思ったりした記事を切り抜き、掲示板に随時、貼っていくという活動である。記事内の考えや行動に対して、ポイントや感想を付けて掲示させていたことで、新聞記事に対して自分の考えや立場を明確にする機会が増えた。

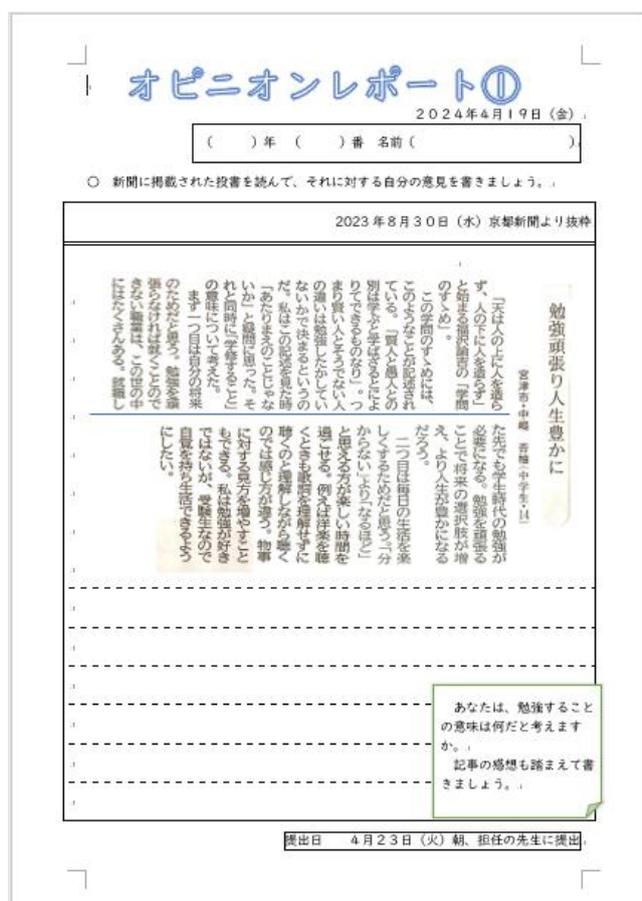


(3) 週末課題での活用

本校では、平日に出す課題とは別に、週末に出す課題を『週末課題』として取り組んでいる。NIE実践を始めてからは、この週末課題を、新聞を活用した課題にしようと考え、オピニオンレポートに取り組んだ。内容は、教師が選んだ新聞記事に対して、読んで思ったこと・考えたことを自由に書く課題である。選ぶ記事は全学年同じであり、課題の裏面には、先週の記事に対する生徒たちの意見の点数を載せて配布していた。自分の書いた意見をもって交流させることまではできなかったが、他者の考えを載せることで、新たな気づきや考えが深まる様子が見えてきた。

また、投書の取組で掲載された生徒の新聞記事を扱うことも多くあり、その結果生徒の自己肯定感や主体性・意欲に大きくつながった。

多くの先生に記事を選んでいただき、教員全体で新聞を扱うという意識をつくることができた。



(4) 投書での活用

国語の授業の一環として、京都新聞の投稿欄「窓」へ意見文を投稿する活動を行った。この投書の活動を行うまでに、上記記載の週末課題のなかで投書の記事について意見文を書く活動を繰り返し取り組ませ、決められたテーマで他者の意見に対して自分の考えを持つ練習を行った。そして本取組では、テーマを自由にし、意見文を書かせて京都新聞に投稿する投書を作成した。

投書をするということは、子どもたちが新聞に参加するということになり、非常に有益であると感じた。

投書を書く 京都新聞に投稿しよう	年 組 番	氏名
---------------------	-------	----

【目標】多様な読み手を想像して、自由なテーマで投書を書く。

- ・関心のある事例や、善悪興味を持っていることや考えていることから、題材を決める。
- ・自分の意見と熱意を整理し、500字以内で書く。
- ・観点が変わるところで、「また」や「まず」「次に」「最後に」、「一つ目は」「二つ目は」などの言葉を入れるとわかりやすくなります。

テーマ	
意見	
根拠	
↓これらを踏まえて・・・	
タイトル	

テーマ (例)	勉強
意見 (例)	一夜漬けでテストに臨むのはよくない。毎日の積み重ねが大切。
根拠 (例)	一夜漬けで臨んだとき、寝不足と追い詰められているという精神的疲労で全然うまくいかなかったため。
↓これらを踏まえて・・・	
タイトル	非効率な一夜漬け



投書に取り組むために、各新聞社に掲載されている投書を読んでいる生徒の様子

4. 成果と課題

(1) 成果

各学年ともに、教科等の学習や学級での取組に新聞記事を教材・素材として取り入れたことで、身近な社会や世の中の出来事に関心をもつようになってきた。

また、新聞を用いて「今」の出来事などを取り上げて知らせたり、論評したりすることを通して、生徒たちと社会生活を直結させ、学習への意欲を引き出すことができた。

そして、教師側が資料としての新聞活用を意識することで、単なる知識にとどまらず、社会との関連の中で子どもたちの思考を広げる指導の工夫を心掛けるようになり、教材研究の幅が広がった。

資料を活用して、考察し、説得力のある説明をしたり、主張したりすることについては苦手意識を抱いている生徒が多い。また、互いに意見を交換するような活動を好まず、他者の意見を取り入れ、自分の考えを深めることについて慣れていない生徒も多い。そのような中で、身近な話題を題材にして、様々な立場の人の気持ちに立って物事を判断することで、他者理解に繋がったり、感想や意見が違うことで、様々な視点から考えたりすることができ、また、深く探求し理解することで、説得力のある説明をすることができる。

(2) 課題

学校全体として読み取る力を伸ばすという目的を達成するため、組織的に取組を継続していくことが必要である。そのためには、年度当初にNIEの年間活動計画を教職員で共通理解し、授業での活用も視野に入れた実践を計画していくようにする。

また、週末課題として取り組んでいるワークシートは、大枠が決まり内容が単調化しているので、さまざまな記事を読み比べるなど、工夫し生徒の自主意欲にもつなげていきたい。

さらに、新聞を活用できる力を生徒に培っていくために、新聞をどのように授業に取り入れていけばいいのか、今後も実践を通して検証していきたい。

新聞記事の読解、発表を通じて、 読解力及び表現力、批判的思考力を育成する

京都府立峰山高等学校 教諭 馬木 勇語

1. 実践の概要

主に国語科、地歴公民科の授業を通じて新聞記事を活用した学習を行った。活動を通して以下の点について身に付ける力として掲げた。

- ①正しい情報を取捨選択し、それらを読み解く情報活用能力
- ②読解力及び表現力、(批判的)思考力

社会の在り方に関わる現実社会の諸課題の解決に向けて探究するための手がかりとなる概念や理論などについて理解するとともに、社会の在り方に関わる情報を適切に調べ、また合意形成や社会参画に向け、国家および社会の形成者として必要な選択・判断の基準となる考え方や経済社会などに関する概念や理論などを活用し、現実社会に見られる複雑な課題について考察、説明することができるよう実践に取り組んだ。

2. 実践の内容

(1) 国語科における実践 (1年生普通科必修・現代の国語)

〈新聞レポート課題〉

2学期より開始し、個人で取り組ませた課題である。記事については今年度は教科担当で指定した。なお、2年次からは「論理国語」の科目において、複数から1つを選択して取り組んでいく予定である。

【取組内容】

生徒は、記事を読んで、以下の2点について記述する。

- ①複数の立場からそれぞれの主張を(適宜調べて)要約(「主体態」で評価)
- ②それぞれの立場から、今後どのような展望が期待されているか、また、その実現にはどのような取組等が必要か推論(「思判表」で評価)

【課題設定の背景】

本校生徒は、日頃から真面目に努力できる生徒がほとんどであり、学習への主体性、知識の定着は一定以上のものがある。一方で、日々取り組んでいる演習課

題や定期考査・模擬試験の結果などを踏まえ、傍線部の言い換えや具体化・抽象化はできるものの、緻密に読もうとするあまり、趣旨の把握を苦手とする生徒が多くいた。展開を見据えた読みができることが、得点の向上だけでなく、実生活にも好影響を与えると考えた。

また、SNSの普及で、誰もが簡単に発信できるようになった時代が到来したと同時に、無意識の間に自分と類似した価値観の中に閉じこもりやすくなっており、主観的な発言も増えているように感じられる。実生活においても簡単に他者を傷つけ、他者に傷つけられる場面が増えたと言える。実生活においてもSNS上においても、何気ない一言が常に複数の立場から俯瞰した一言となることを目指し、良好な人間関係を構築できる力を育むことを目指した。

【成果と課題】

①成果

- ・期日までの休み時間にも書き方を含め記事について話し合う場面が増えた。
- ・複数の視点で分析するため、一つはより自分に近い立場からアプローチができたため、その問題について自分事として生徒は考えやすかった。
- ・生徒は現状に関する改善策を考えた際、無意識のうちに人任せにしているケースが多いことを自覚し、改めて「自分にできること」を考えたり「複数の立場と協力すること」の重要性について実感したりして、物事を動かすための実際的方法について考えようとする力がついた。
- ・教科書教材を用いた授業においても、「異なる立場からの視点」について考えることの抵抗感が、少しずつ緩和されているように思われる。
- ・レポートそのものは、二つの視点から記述することを条件としているが、状況に応じて、発表し合い深化させたり、三つ目、四つ目の視点を模索し話し合ったりするなど、活用しやすい取組となった。

②課題

- ・効果の検証、力の伸長にはさらに回数を増やして実施する必要がある。
- ・授業時間数の確保や教科担当者による評価のブレの軽減等から、テーマとする記事や述べる立場を限定してしまった。ゆったりとした時間設定で、テーマとする時事問題や立場の絞り込みなどを、生徒自ら想像し、視野を広げさせたいところである。
- ・取り上げる時事問題について、各新聞社での論調の違いなどに注目させられていない。
- ・グループで取り組む課題にする方が深めやすく、育みたい力をつける課題となった可能性がある。評価や時間を意識して個人での取組となったが、生徒の主

体性に任せて、挙げられるかぎり多くの立場から問題について注目させたり、軌道修正をしながら改善に向けた方策について背景を調べるなどして考えを深めたりできると思われる。

- ・日頃から他の時事問題について関心を持たせるきっかけづくりには繋がらなかった。ネットニュースさえもあまり目にしていない状況は依然変わらない。

【取り組んだ記事タイトル】

①「甲子園「脱丸刈り」の風」（読売新聞）

立場A：「脱丸刈り」賛成派／立場B：「脱丸刈り」消極派

②「「ど派手」成人式衣装の魅力発信」（朝日新聞デジタル）

立場A：「ど派手成人式衣装」肯定派／立場B：「ど派手成人式衣装」消極派

③「物流 2024 問題」（東京新聞）

立場（三つのうちから選択すること）：ドライバー／荷主／受取手

（2）地歴公民科における実践1（2年生普通科必修・公共）

〈「読売新聞ワークシート」を用いた実践〉

【取組内容】

- ①月に1度のペースで「読売新聞ワークシート」をデータで配信し、ワークシート中の問い、もしくは教員が独自に設定する記事内容に関する発問に取り組ませる。（授業外）
- ②発問に対する自身の考えを深めるために、関連する内容の新聞記事や、同じ内容を扱う別の新聞記事を参照するよう指示。（授業外）
- ③発問に対する自身の考えを4人ほどのグループ内で交流する。グループで意見を取りまとめ、パワーポイントを作成し学級全体で共有する。（授業内）

【実施上のポイント】

- ①記事内容を選定する上では内容に偏りが出ないように、可能な限り様々な分野・情報に触れられるように工夫する。
- ②独自の発問は、「複数の意見、多様な立場から考えられること」や「ほかの事例との繋がりを意識できること」などを意識して設定する。
- ③意見の交流の際には、「共感的な姿勢」で他者の意見を聞くことと同時に、「複数の視点から分析すること」を意識させた。

【成果と課題】

年度当初は、記事内容の読解や発問に対する自身の考えの表現・共有で苦勞す

る生徒も一定数存在したが、継続的に取り組みを続けていくなかで読解力・表現力ともに向上がみられた。また、授業内で意見交流の時間を充実させることで、多様な価値観に触れ、同時に一人一人の考えを深めさせることができた。

高校生にとって身近なSNSトラブルの記事や教育に関する話題に対しては勿論、「公共」での政治分野の学習内容や、他教科の学習内容と関連付けられる内容を扱った新聞記事を題材にした際、生徒のより意欲的な姿勢が目立った。



(3) 地歴公民科における実践2 (1、2年生普通科必修)

〈「新聞コンクール」を通じた実践〉

【取組内容】

1年生155名、2年生160名の総勢315名が「第14回一緒に読もう！新聞コンクール」に取り組み応募した。

【成果と課題】

- ①新聞を読み記事の要約をし、家族や友人とその記事について対話をして意見を述べたが、記事の要約ではその記事の重要なポイントを押さえる力を養うことができた。家族や友人との対話では、多くの生徒が保護者と話をし、生徒の知らない知識や様々な視点から意見を聞くことができた。新聞を読む以上の知識を得ることができ、学びが深まった。
- ②生徒の関心は様々で、同年代の高校生の記事から国際関係まで多岐にわたった。例えば、全国高校野球選手権大会において慶応高校が第2回大会以来、107年ぶり2回目の優勝をした記事では、エンジョイベースボールを掲げ、丸刈りをやめるなど新しい価値観をもたらしたことに触れていた。また、日米韓の3カ国首脳がワシントン近郊で会談した記事では、授業で学習した安全保障協力に触れて、今後の安全保障のあり方など考察していた。東京電力福島第一原発から出た処理水の海洋放出に関する記事については、国際社会の理解や批判など多面的・多角的に考察することができた。

(4) 地歴公民科における実践3 (3年生普通科選択・現代社会)

〈「紙面比較の研究授業」実践〉

【取組内容】

授業において、朝日新聞、京都新聞、産経新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞の6紙の1面を比較する研究授業を行った。授業で取扱う単元が国際政治であったため、広島で開催されたG7サミットに関する記事を用いた。比較する視点として、写真、見出し、記事の内容に着目し、特に写真の与える印象が大きいため、まず写真の比較を行った。

【成果と課題】

- ①生徒は平和記念公園での献花する写真やサミットの集合写真、首脳同士の対話の写真などについて、新聞社による違いに関心を持ち、見出しや記事の内容からは、平和や国際秩序やウクライナ支援をあげる記事など、各紙の見出しや写真との関連など様々な視点で比較することができた。
- ②学習全体を通して複数の紙面を比較したことがなった生徒にとって、紙面の比較によりその違いに気づくことができ、多面的・多角的にG7サミットや平和について考察することができた。
- ③6紙の記事の比較はボリュームが大きく、比較しきることができなかった。記事のポイントを絞るなど比較しやすい工夫を講じる必要があった。

(5) 生徒会活動における実践

〈「峰高スクラップ」〉

【取組内容】

本校における生徒会執行部の報道委員(各クラスより2名選出)による新聞記事に関する全校放送(昼休み)を行い、新聞記事の紹介及び感想、考察を放送した。新聞読解及び放送を通じて社会への関心を高め、社会の出来事を自分事として捉え思考力を深めることを狙いとした。また、放送を実施することで全生徒の時事的問題などに対する興味関心を高めることも目指した。

【実施上のポイント】

- ①各クラスの報道委員2名1組が新聞記事から紹介する記事を選ぶ。
※新聞は本校キャリアカフェ(生徒共有スペース)に設置
- ②選んだ記事の概要紹介及び感想、考察を所定の用紙にまとめ、その内容を放送で紹介する。
- ③記事選定は月、水曜日の昼休みとする。

④放送日は、月曜選定分は翌々日水曜日、水曜日選定分は翌々日金曜日を基本とする。

※例) 1-1 組報道委員 2 名は月曜日に記事を選んだ場合、火曜日に担当教員まで用紙提出 (確認)、水曜日の昼休みに放送実施

例) 1-2 組報道委員 2 名は水曜日に記事を選んだ場合、木曜日に担当教員まで用紙提出 (確認)、金曜日の昼休みに放送実施

【成果と課題】

①最新の記事を紹介することで、今日の社会問題などに対する興味関心、知識理解は多少深まったと感じるが、生徒全体の共有にまでは至らなかった。また、生徒会の報道委員中心の活動に限定され、その他生徒にまで活動範囲を拡大することができなかった。紹介記事の校内掲示、生徒所有タブレットへの配信など、共有する工夫をより一層図っていく必要があった。

②紹介記事の内容について、社会問題の考察に迫ることが難しい班もあり、取り扱う記事の内容とその理解、分析について担当教員の指導が徹底できなかった。生徒実態及び記事内容に応じ、放送に至るまでの事前指導をより丁寧を実施していく必要があった。



新聞記事を通じて視野を広げ、社会につながる

京都橘高等学校 教諭 小坂 至道

1. 本校での新聞活用（概要）

本校では、もともと複数社の新聞（朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、京都新聞、日本経済新聞および The Japan Times）を用意し、職員室前の自学習・相談スペースに隣接して閲覧できるように工夫されている。特に、昨年度、司書教諭の協力のもと、新聞の閲覧台が新調され、よりゆっくりと見やすくなった。

昨年度は、新聞社のプログラムを採用しながら総合的な学習の時間・総合的な探究の時間などの活動に活かしてきた。また、社会の授業を中心に社会の課題を知るきっかけとして活用する場面が多かった。

（写真1）

図書室前の新聞閲覧台下の棚には数日分の新聞が置かれ、過去に遡って記事を読めるようになっている。また、図書室（左奥）へのアクセスも良い。



2. 実践事例

ここからは、おもにHR活動や教科指導の中で新聞を活用した事例について報告する。今年度、おもにN I E実践に関わった教員は国語科と社会科の教員で、中学生の学習活動の中での新聞活用を中心に報告したい。また、昨年度から継続している高校の総合学習の取り組みについても記したい。

（1）新聞記事リレー（中学1年）

中学の国語科教員が、担任としてHR活動の一環で実施した取り組みで、他の関心領域や視点を豊かにし、表現力・文章力を磨くことを目的としたものである。

実施期間は、2学期から3学期のおおよそ半年で、週ごとに担当者が新聞記

事を選んで取り組み、それを次の担当者に引き継いでいく形式であった。

【実施内容・方法】

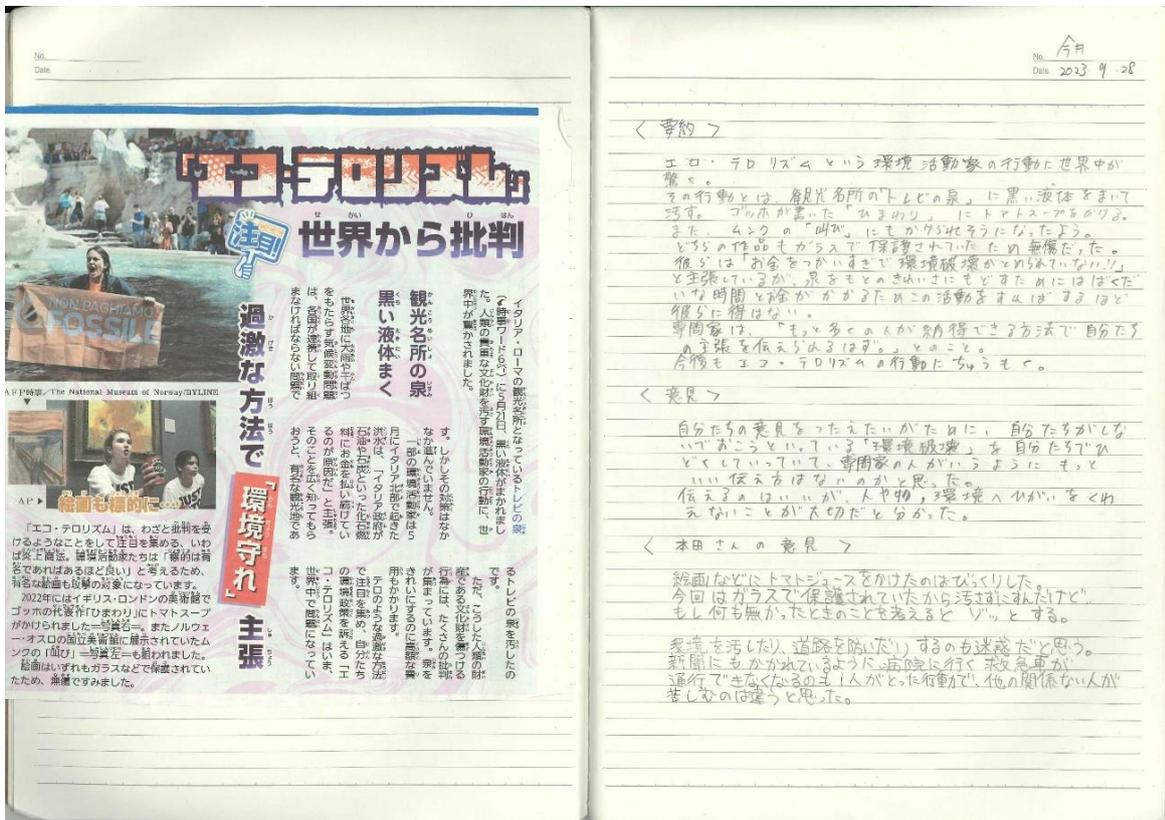
- ①自分の興味のある新聞記事を見つける
(各家庭で行う。職員室前の新聞記事を利用する際は、先生にコピーを依頼する。)
- ②自分の興味のある記事をノートに貼る。
- ③記事の要約・自分の意見をノートの右側に記入する。

ノート作成の注意点

- ※一行にならないようにする。
- ※箇条書きにならないように、接続詞を活用する。
- ※主語・述語を意識して、読みやすい文章を心がける。
- ※美しい字で誰が見ても読みやすいようにする。

- ④週の初め（おもに月曜日）に、ノートを次の担当者に渡す。
- ⑤受け取った担当者は、前回担当者の選んだ記事（要約・意見）を読み、自分の意見（ノート右下）を記入する。
*以後、これを繰り返していく

（写真2） 新聞記事リレーノートの例



【生徒のようす】

- ・週交代で実施したので、生徒は1週間に1回は新聞を見るという習慣がついたようである。
- ・生徒どうしが互いの興味・関心を知り、いろいろ話す時のきっかけや素材となっていた。
- ・要約や意見の記述を通じて、作文で気をつけるべき要点を掴んでいったようである。

【担当者のふりかえり】

- ・教員がチェックをしたり、生徒にフィードバックしたりする時間を十分に設けられていなかったため、生徒はやりっぱなしになってしまったのではないかと。扱い方によって、もう少し活動の意義を深められたのではないかと考えている。
- ・選んだ記事によって生徒の興味関心のある分野が分かったので、立ち話や面談などの話をする際の話題の材料となっていた。
- ・要約を課していたので、記事の内容を理解し、それを文章で表現するという作業が入り、生徒の国語力向上にもつながったのではないかと考える。

(2) 国語Aの授業における新聞記事活用（中学3年）

現代文の問題集を使ったトレーニングにおいて、テーマ・問いへの理解を深め、視野を広げていくために新聞記事を使う機会を設けた。

【実施内容・方法】

①授業冒頭で「評論速読トレーニング 700」を使って、450～700字程度の文章を読み、問題を解く（10～15分）。

※この教材には「日常よく見るカタカナ語」や「反対言葉」、「方言を使った標語」、「グローバル化の例」、「コンピューターウイルスについて」、「現代と5年前の社会の違い」といったテーマやそれにふさわしい問いが設定されており、生徒は文章を読解し、問いについて考えて書く必要がある。

②班の中で、お互いに書いたものを読みあい、話し合う。その際に、テーマに関連する新聞記事をiPadで検索し、その記事を読んだうえでさらに話し合いを続ける。

※テーマ・問いに関する周辺知識を増やし、理解を深めることを目的とした。

③班での話し合いを踏まえて、自分たちの解答や考えを発表する。

※自分たちの考えを表現するとともに、教員・生徒との質疑応答などを通じ、テーマ・問いへの理解を深め、視野を広げることを目的とした。

【生徒のようす】

- ・社会の変化について、生徒は数年前のことでも知らないことが多く、それらを調べることで自分が面白いようすであった。
- ・昔の記事を調べる中で、新聞が当時どのような話題・言葉を取り上げて記事にしているかを知ることができるのも生徒の好奇心をくすぐるようで、生徒の活動が活発になっていた。
- ・新聞記事を調べた後の生徒の話し合いでは、現代社会で起きている問題によりいっそう目を向けることができるようになり、話し合いの内容にも広がりが見られた。

【教員のふりかえり】

- ・デジタルでさまざまなことを簡単に検索できる時代であるからこそ、新聞記事そのものが重要な記録として残り、参照されるものであるということ、新聞の可能性として実感できた。
- ・生徒は、新聞紙を通じてさまざまな記事を目にし、そこからの連想を広げたり派生した事項へと関心を広げたりしていたようで、幅広いテーマを扱う新聞の力を実感した。

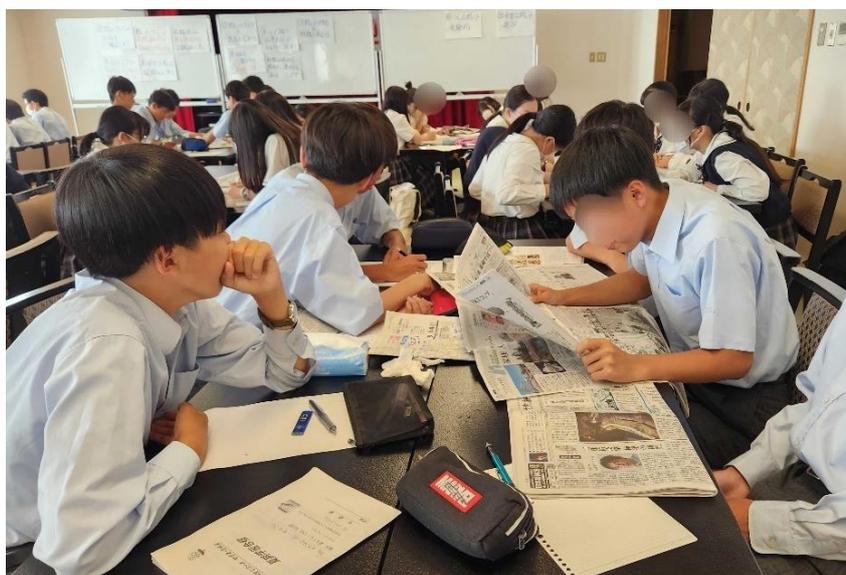
（3）問いづくりによる新聞記事の読み深め（中学3年）

夏合宿の社会科の1コマとして、QFTの手法にもとづいた問いづくりを行った際、その問いを見出す素材として新聞紙を活用した。これは、昨年度は高校3年生の学校設定科目の中で行ったワークであるが、中学生も十分に期待に応じて、楽しく問いづくりに取り組むことができた。また、記事の内容についてもただ見流すだけでなく、じっくりと読み、その理解を深めたようである。

（写真3）

新聞紙を読み込んでいる生徒のようす。班ごとに興味をもった記事を決めて、みんなで問いづくりを進める。

最後には、どのようなことが気になって記事を選んだか、そこからどのような問いを立てたかを共有した。



(4)「オンライン授業はありか、なしか」新聞投稿（高校2年）

現代社会の課題について考える「公共」の授業の一環として、高校生はコロナ禍でのオンライン授業をどう受け止めていたか、ふりかえって現在どう考えるかを作文した。読売新聞社と連携して実施し、新聞の読者欄に応募して、4人分の掲載をいただいた。

テーマが身近に体験したものであっただけに、具体的に実感を持った文章を書いた生徒が多かった。内容としては、オンライン授業に好意的ではない生徒が半数を超えていた。教員と生徒、生徒同士といったコミュニケーションの有無や、そこから生じるほどよい緊張感などを授業に求めていることがよく伝わってきた。もちろん、解熱後の登校停止期間に授業を受けられて授業内容が遅れずに済んだなどのメリットを上げるものもいたので、場面・場合を選んでの活用が求められていると考えられた。

こうした内容を授業の中でフィードバックし、生徒同士も話し合う中で、授業への参加態度や授業をうける意味など、改めて自分たちでも見直したようであった。

(5) 総合的な学習の時間における生きる指針づくり（高校3年）

本校の総合／探究学習の総まとめの段階として位置づけているのが、「私の生きる指針」であり、その成果を新聞記事の体裁で仕上げるプログラムである。

①「自分らしく生きる」分科会

生徒は、自分の関心に応じて講師を選び、1～2の分科会に参加して話を聴き、人生の先輩から生きるうえでの価値や人生への向き合い方を学んだ。

分科会のテーマは、性の多様性（トランスジェンダーなど）、死ぬということ（死生観）、闘病や人種差別、人生設計・ヘルスリテラシー、若者の居場所づくりなど。

②「私の生きる指針」

自分がこれから生きる上で大切にしたいことを四字熟語、イラスト、標語、詩、漫画など自由な形で表現した。これまでの学びを形に残すという意味で有意義であった。

③インタビュー・記事作成ワークショップ

朝日新聞社との連携で、インタビューの仕方や記事のまとめ方については現役の新聞記者の方からワークショップ形式で指導を受けた。その後、ペアで相手の「生きる指針」についてインタビューし合うことにより、さらに中身を掘り下げて記事にした。

④「私の生きる指針」インタビュー新聞発行

上記③の成果物を朝日新聞の人物紹介記事「ひと」の形にまとめ、クラスごとの行事写真などとともに、クラスの卒業記念新聞として発行した。

(写真4)

「私の生きる指針」をクラスごとにまとめた新聞。

3年間、6年間の学園生活での学びから得た、自分の価値観や人生の方向性が示されている。

卒業アルバムとともに配られ、大切な記念品にもなっている。

ふと卒業アルバムをめくるとき、自分が高校の頃、何を大事に考えていたかを思い出し、過去の自分に励まされたら・・・という教員の願望もある。



3. 成果と課題

【成果】

- ・新聞紙（デジタル記事も含む）を読むことにより、テーマそのものへの関心が深まったり、周辺知識への関心の広がりが見られた。
- ・生徒も教員も、新聞記事を比較的正確な過去の記録としてとらえて検索し、現在の社会問題と関連付けて考える素材として活用できることが実感された。

【課題】

- ・iPadなどを活用した記事検索は比較的容易に進むが、自発的に新聞紙に手を伸ばすに至るかという点では、まだまだハードルの高さがある。
- ・各社の新聞記事の比較、新聞記者の視点を俯瞰してとらえる取り組みなど、今後の生徒のリテラシーを上げていくための取り組みには十分に至っていない。
- ・いわゆる文系教科や探究学習での取り組みは進んだが、理系教科や他の実技教科へのアプローチが不十分であった。これらが加わることでより一層、幅の広い、深みのある取り組みが生まれるのではないだろうか。

高等学校 [総合的な探究の時間]

過去の新聞報道から学ぶ地震災害の被害状況や防災について ～震度と被害の関係から防災に対する意識向上を目指して～

京都両洋高等学校 教諭 西村 将太

1 はじめに

本校は1915（大正4）年に開校された京都正則予備校を前身とする、創立110年目を迎える、全日制普通科の高等学校である。「東洋と西洋の架け橋となる国際人の育成」という建学の精神のもと、「3年間という高校生活のなかで社会に出て役立つ青年として育て、次のステージに送り出す」という教育目標を掲げている。その実現のために、「自律」「尊重」「対話」「創造」という4つのキーワードにこだわりながら、基本的な生活習慣を確立し、目標を定め、他者を思いやりつつ協働できるなど「目指す生徒像」の精神を取り入れた教育活動を展開している。このような精神のもと、本校のコミュニケーションテーマである『「人」として、輝く。』のために、日々生徒と向き合い、学習活動・クラブ活動に取り組んでいる。

以上のような理念のもと、本校には4つのコースが設置されており、令和6年度においては、各学年13クラス（第3学年のみ14クラス）で編成され、全校生徒数は1300名を超える京都市内でも有数の大規模校である。

2 NIEの取り組みのねらい

本校は令和5年度よりNIE推進事業実践校の指定をいただいたが、それ以前より、朝のHRの時間を利用し、新聞記事を用意し、その内容について考えをまとめたり、意見を交換したりするなどの取り組みを行っていた。また、コロナ禍において、ICTによるデジタル化が進む中、本校では全校生徒にiPadを持たせ、状況に応じてオンライン授業や授業のICT化を推し進めてきた。その中で、朝日新聞および読売新聞の新聞記事データベースを利用し、NIE教育を進めてきた。

一方で、体系だった「探究活動」として新聞記事を活用してきた例はなく、今回のNIE実践校の指定を受け、どのように進めるべきであるか一から構築を行った次第である。

今回主だって活動に取り組んだのは1年生および2年生のK特進コース（国公立大学への進学を目指すコース）の2クラスである。普段から基礎基本となる学習に加え、国公立大を目指すための学習に力を入れている中で、教科学習を横断的に行うことで、これまで得られなかった視点から社会のことを考えたり、これまでに培った力を活用して情報を収集、整理し、まとめたりすることを目的とした。また、学年の枠を超えてグループで取り組むことで、情報や知

識の共有、どのように整理し、まとめるのかといった思考の深化に重点を置くことにも力を入れた。教科学習だけではなく、横断的な学びや知識の活用を通して、社会を見る力を主体的に身につけることをねらいとした。

3 実践事例と課題・反省点

上述した通り、今回主に取り組んだのはK特進コースという国公立大学への進学を目指すコースに在籍する1,2年生18名である。2024年1月1日に能登半島地震が発生し、また、近年南海トラフ地震への警鐘が鳴らされていることを受け、日本において発生した地震の被害および防災について、新聞記事を中心に情報を集め、新聞記事形式にまとめた。K特進コースは少人数であり、クラスも隣接しており、学年間の交流も活発であったため、本取り組みにおいても学年の枠を取り除き、3人のグループを6グループ形成させた。それぞれのグループで主だった震災の被害状況を調べ、まとめさせたり、地震の発生メカニズムや防災について調べ、まとめさせたりすることとした。震災については、生徒にとって身近なものであろう1995年の阪神・淡路大震災以降について調べた。

課題としては、本取り組みにおける準備時間も含め、まとまった時間がなかなか取れなかったことにある。本校では総合的な探究の時間において、取り組み内容が年度当初よりある程度決まってしまうっており、その中に新たにNIEの取り組みを導入することは難しかった。そのため、今回取り組みを行ったK特進コースの生徒たち以外では、まとまった時間が確保できず、朝のHRでの取り組みにとどまってしまった。

また、〈表〉のとおり、時間が4時間しかとることができず、完成までたどり着くことが難しかったことも反省点として挙げられる。NIEを各コースにおいてしっかりと時間をとって取り組むためには、より学校全体を巻き込みつつ、理解を得、時間を確保することと、このようなINEの取り組み、また、探究活動に取り組むための研修が必要であると痛感した。

新聞の配架場所についても、これまでも図書室に置いてはいたが、生徒たちが手にとりやすいとは言えなかった。さらに、本取り組みにおいても人文の配架場所については頭を悩ましていたが、少しずつではあるが、新聞記事の配架についてもより生徒の見やすい場所に置くなど工夫を凝らしていきたいと考えている。



〈表：NIE 取り組みの活動内容〉

時	活動内容	留意点・活用資料
	目標：地震震度と被害の相関について把握し、グループの役割を決める	
1	<p>・ 気象庁のwebサイトの「日本付近で発生した主な被害地震」のページ (https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/higai/higai1996-new.html#higai1996) から、地震の最大震度と人的・物的被害の相関を調べ、まとめるべき震災を絞る。</p> <p>・ 絞られた地震から4グループがどの震災について深めるかを選ぶと同時に、地震発生メカニズム、防災についてを深めるグループを決定する。</p> <p>・ 情報の収集およびグループごとに見通しの作成</p>	<p>・ 最大震度と被害状況の相関については、負傷者や家屋破損の数が3桁を越える部分を考えて。</p> <p>・ 調べる地震については、特に指示はしなかったが、結果的に生徒にとって記憶に新しかったり、社会に大きな影響を与えたものが選ばれた。</p> <p>・ グループについてはくじを作成し、ランダムで3人1組となるようにした。</p> <p>○資料：京都新聞、朝日新聞、気象庁webサイト、「朝日けんさくくん」「ヨミダススクール」</p>
	目標：前時において決めた課題を深め、情報を共有しながら深めていく	
2	<p>・ 各グループで決定した課題について「朝日けんさくくん」や「ヨミダススクール」を活用しながら、時系列で情報を整理していく。</p> <p>・ 防災や地震メカニズムのグループはそれぞれ気象庁などのページを参照しながら情報を整理する。</p> <p>・ 適宜写真などを印刷したり、レイアウトを決めたりしながら進めていく。</p>	<p>・ 地震について調べる際には最終的な被害状況以外にも、時系列にしたときにどのような情報の変遷があったのかも調べさせ、考えさせた。</p> <p>・ 調べ学習においてwebサイトを活用する場合は信頼性の高いドメインを活用するよう指導した（具体的には"go.jp""lg.jp""ac.jp"など）。</p> <p>○資料：京都新聞、朝日新聞、気象庁webサイト、「朝日けんさくくん」「ヨミダススクール」</p>
	目標：新聞記事のレイアウトを学び、そのレイアウトにまとめた情報をはめ込む	
3	<p>・ 新聞記事のレイアウトを学び、それに倣って模造紙のレイアウトを考える。</p> <p>・ レイアウトにしたがって、調べた内容やまとめた内容を下書きしていく。</p> <p>・ 適宜写真を印刷したり、情報を再度収集したりし、より分かりやすい紙面を目指す。</p>	<p>・ 新聞のレイアウトについては、書かれる内容の分量と照らし合わせて各グループで考えた。</p> <p>・ プリンターの関係上、印刷については白黒印刷である。</p> <p>○資料：京都新聞、朝日新聞、気象庁webサイト、「朝日けんさくくん」「ヨミダススクール」</p>
	目標：模造紙に調べた内容を記し、完成させる。	
4	<p>・ 内容の下書きから、時間があればペン入れまで行う。</p> <p>・ 内容についてはもちろん記事の丸写しではなく、まとめた紙面を整理した上で、わかりやすくまとめるよう工夫する。</p> <p>・ 取り組みを終えての感想をロイロノートで提出する。</p>	<p>・ 時間が限られているため、ペン入れについては無理にさせなかった。</p> <p>○資料：京都新聞、朝日新聞、気象庁webサイト、「朝日けんさくくん」「ヨミダススクール」</p>

<図1：生徒からの感想（一部抜粋）>

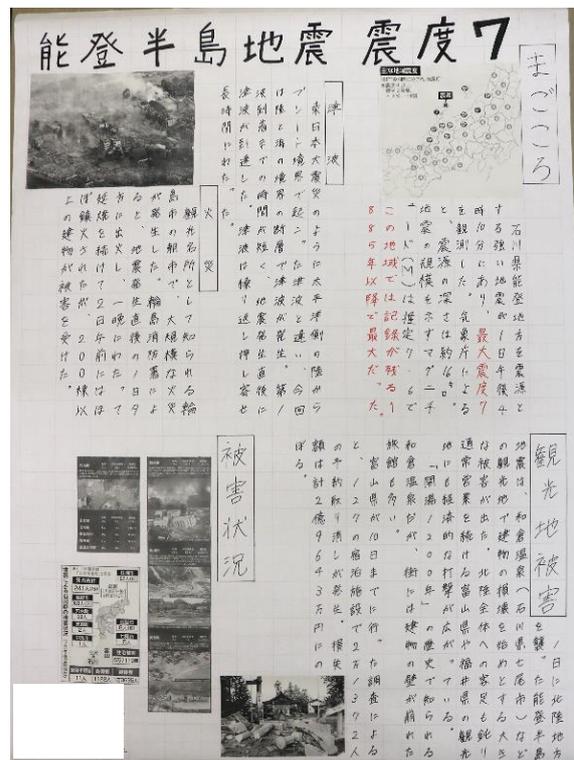
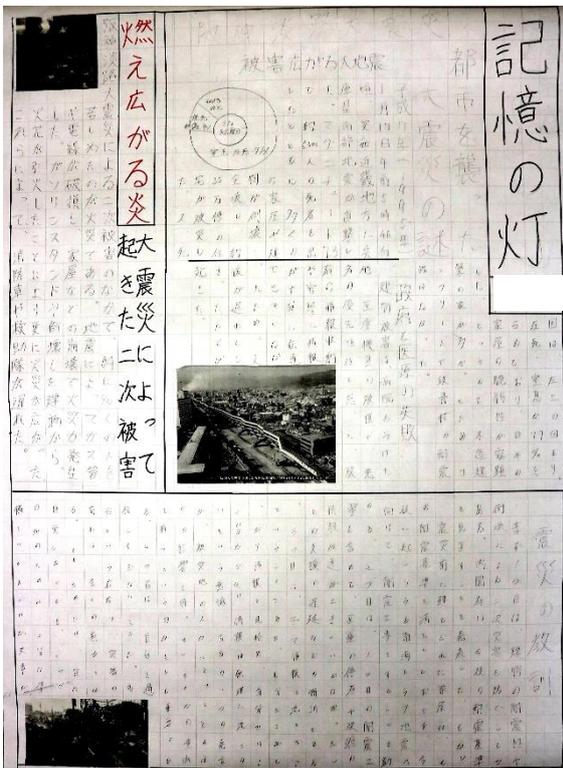
短い時間でしたが、みんなと同じテーマについて考え調べることは自分の体験に加えて新しい知識を得られる貴重な経験になったと思います。

四時間は短かったのではないかという意見も少しあった中で感じたのは、本来の情報収集や文章の構成、写真、題名など詳しく書かれていること。毎日これを続けていて、予想もつかない新情報を届けていると思うと震災について更に知れたことに加えて、特に新聞社の凄さに気づけた4日間になったと思う。

こういった調べてまとめる作業は、自分たちが知らなかった情報を収集することができたり、長い文章をまとめてわかりやすく伝えようとする力が身につくと考え、今後にも役立つと思うのでまた機会があれば取り組んでみたいと思います。しかし、今回は与えられた時間が少なかつたことから、一人一人に与えられる役割に偏りが出てしまい暇を持て余す人が出てしまったことが悔やまれます。しかし、その人もその人なりに今できることを考えて取り組み、情報を集めて班の人に共有するなどして取り組んでくれていたのでとても助かりました。

今年元旦という一番団欒として、みんな気持ちの安らぎをしていた時に地震が起こったりしてたくさんの人がなくなっていて、調べていく中でも、地震発生時にこんな行動してはいけないと意外と知らなかったことが多々ありました。少しでも知識を学べたことでいつか使える時があると思うと、この活動をやって良かったと思っています。

<図2：作成した模造紙（一部抜粋）>



年度	校数	<これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校>
1994	2	聖母学院小学校、京都府立商業高等学校(現すばる高等学校)
1995	3	聖母学院小学校、京都市立修学院中学校、同志社高等学校
1996	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1997	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1998	2	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校
1999	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2000	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2001	6	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立花山中学校、八木町立八木中学校、京都文教女子中学校
2002	9	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校、八木町立八木中学校 京都文教女子中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校
2003	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、亀岡市立曾我部小学校 八幡市立美濃山小学校、京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校 向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校 華頂女子中学高等学校
	4	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 八木町立八木中学校
2004	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、聖母学院小学校 亀岡市立曾我部小学校、八幡市立美濃山小学校、京都市立洛北中学校 京都市立洛南中学校、向日市立勝山中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
	6	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、京都市立伏見中学校 八木町立八木中学校、花園中学高等学校、京都府立北稜高等学校
2005	9	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、聖母学院小学校 京都市立洛南中学校、京都市立洛北中学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 長岡京市立長岡第三中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立塔南高等学校
	8	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立伏見中学校、向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校 花園中学高等学校、華頂女子中学高等学校
2006	10	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立鏡山小学校 城陽市立寺田西小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校、京都市立旭丘中学校 京都教育大学附属桃山中学校、亀岡市立育親中学校 京都市立塔南高等学校、京都市立洛陽工業高等学校
	7	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立洛北中学校、京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
2007	11	京都市立鏡山小学校、京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校 城陽市立寺田西小学校、向日市立第5向陽小学校、京都市立旭丘中学校 京都市立久世中学校、京都市立西京高等学校附属中学校、同志社中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	7	(準)京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立洛北中学校 京都市立蜂ヶ岡中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校

年度	校数	<これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校>
2008	10	京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、京都市立吉祥院小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立久世中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都市立下鴨中学校、城陽市立西城陽中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	2	(奨励校)立命館小学校、京都市立周山中学校
	5	(準)京都市立紫竹小学校、京都市立鏡山小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 京都市立旭丘中学校、京都教育大学附属桃山中学校
2009	10	京都市立吉祥院小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 京都市立二条中学校、京都市立下鴨中学校、京都市立桂中学校 城陽市立西城陽中学校、綾部市立上林中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校
	6	(準)京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、向日市立第5向陽小学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都府立園部高等学校 京都学園高等学校
2010	10	京都市立月輪小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立二条中学校 京都市立桂中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校、東山中学高等学校
	7	(準)京都市立吉祥院小学校、京都市立松尾小学校、京都市立静原小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立下鴨中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都学園高等学校
2011	10	京都市立月輪小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、東山中学高等学校 京都府立東稜高等学校
	5	(準)京都市立吉祥院小学校、京都市立一橋小学校、京都市立下鴨中学校 宮津市立養老中学校、京都府立鴨沂高等学校
2012	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、 京都光華中学・高等学校、京都府立東稜高等学校
	5	(準)京都市立月輪小学校、京都市立一橋小学校、宮津市立養老中学校 東山中学高等学校、京都府立鴨沂高等学校
2013	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校 京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都府立向陽高等学校 京都光華中学・高等学校
	2	(準)京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校
	1	(トライアル校)宇治市立笠取第二小学校
2014	10	京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校、京都市立明德小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立双ヶ丘中学校、京都市立西京極中学校 長岡京市立長岡中学校、八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校 京都府立向陽高等学校
	5	(準)京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校、京都市立藤ノ森小学校 木津川市立木津南中学校、京都光華中学・高等学校

年度	校数	<これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校>
2015	10	京都市立明德小学校、京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校 京都市立双ヶ丘中学校、京都市立伏見中学校、八幡市立男山東中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都府立東舞鶴高等学校 平安女学院中学校高等学校
	3	(準)京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都光華中学・高等学校
2016	10	京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校、京都市立宇多野小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立伏見中学校、京都市立大枝中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都女子中学校高等学校 京都府立東舞鶴高等学校
	2	(準)八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校
2017	11	京都市立宇多野小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立京都御池中学校、京都市立大枝中学校 木津川市立木津第二中学校、亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校 京都女子中学校高等学校、京都府立久御山高等学校
	3	(準)京都市立高倉小学校、京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校
2018	11	京都市立竹の里小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京都市立京都御池中学校、京都市立深草中学校、木津川市立木津第二中学校 亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校、南丹市立八木中学校 ノートルダム女学院中学高等学校、京都府立久御山高等学校
	0	
2019	9	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立深草中学校 南丹市立八木中学校、ノートルダム女学院中学高等学校 京都府立須知高等学校
	2	(準)京都市立京都御池中学校、綾部市立上林中学校
2020	8	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立大淀中学校 龍谷大学付属平安高等学校、京都府立須知高等学校
	1	(準)綾部市立上林中学校
2021	9	京都市立竹の里小学校、京都市立羽東師小学校、京田辺市立草内小学校 京都市立大淀中学校、京都市立花山中学校、八幡市立男山東中学校 宮津市立栗田中学校、京都府立久美浜高等学校・丹後緑風高等学校久美浜学舎 龍谷大学付属平安高等学校
2022	9	京都市立神川小学校、京都市立羽東師小学校、京田辺市立草内小学校 京都市立花山中学校、京都市立小栗栖中学校、八幡市立男山東中学校 宮津市立栗田中学校、京都府立丹後緑風高等学校久美浜学舎 京都橘中学校・高等学校
2023	13	京都市立新町小学校、京都市立御所南小学校、京都市立光徳小学校、 京都市立七条第三小学校、京都市立神川小学校、京都市立羽東師小学校、 京都市立西京高等学校附属中学校、京都市立小栗栖中学校、綾部市立八田中学校、 宮津市立栗田中学校、京都府立峰山高等学校、京都橘中学校・高等学校、 京都両洋高等学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
2024	14	京都市立新町小学校、京都市立御所南小学校、京都市立光徳小学校、 京都市立七条第三小学校、京都市立上高野小学校、京都市立伏見南浜小学校、 京都市立羽束師小学校、光華小学校、京都市立松原中学校、 京都市立西京高等学校附属中学校、綾部市立八田中学校、宮津市立栗田中学校、 京都府立峰山高等学校、京都両洋高等学校

2023(令和5)年度 京都府NIE実践報告書

2024年10月発行

編集 京都府NIE推進協議会事務局

〒604-8577 京都市中京区烏丸通夷川上ル

京都新聞社内

TEL：075-241-5231

Email：nie@mb.kyoto-np.co.jp